

東京專門學校  
教育科  
孟子必讀講義  
五部

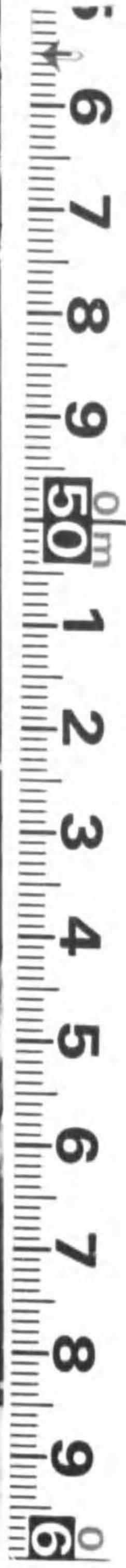
62-388



\*1200701679802\*

62

388



始



谷口豐五郎述

孟子必讀講義

早稻田大學出版部藏版

# 孟子必讀講義目次

諸言	.....	一
(一) 仁義章	梁惠王上	一三
(二) 牽牛章	梁惠王上	一九
(三) 雪宮章	梁惠王下	四三
(四) 進賢章	梁惠王下	五二
(五) 王人章	梁惠王下	五六
(六) 當路章	公孫丑上	五九
(七) 浩然章	公孫丑上	六八
(八) 四端章	公孫丑上	九二
(九) 矢人章	公孫丑上	一〇〇
(十) 取人爲善章	公孫丑上	一〇四

# 孟子必讀講義



緒言

孟子とは何ぞ孟軻氏の書なり孟子必讀とは何ぞ孟子中より尤も肝要なる部分を抄したるなり我父藍田龔に尙書必讀なるものを作り諸生に課せり余亦其鑿に倣ひ孟子必讀を作るなり夫れ聖賢の書載する所は皆金科玉條にして固より取捨を其間に容るべからず然れども初學に取て最も服膺すべき分を擇んで後進に課するは亦善誘の資なりと信ず讀者其僭妄を咎むる勿れ

谷口豊五郎述

史記の列傳に曰く  
孟軻は騶人なり業を子思の門人に受く道既に通して齊の宣王に遊事す宣王用ふる能はず梁に適く梁の惠王言ふ所を果さず則ち見て以て迂遠にして事情に濶なりとなす是の時に當り秦は商鞅を用ひ楚魏は吳起を用ひ齊は孫子

田忌を用ひ天下方に合従連衡を務めて攻伐を以て賢となす而して孟子乃ち唐虞三代の徳を述ぶ是を以て如く所の者合はず退て萬章の徒と詩書を序で仲尼の意を述べ孟子七篇を作る

と孟軻氏の經歷及孟子を作る所以を述ぶる簡にして要を得たりと謂ふべし

孟軻氏の生卒年月に就ては諸説紛々未だ確定せず周の烈王四年己酉に生れ赧王の二十六年壬申に卒せりとの説稍正確に近し月日は舊説に従ひ周曆四月夏曆二月

日に生れ正月夏曆十月十日に卒したりとすべし而して壽蓋八十四歳

夫れ其人を崇ひ其書を読むもの其時勢を知らずして可ならんや今孟子の生れしより卒するまでの列國年表を摘録して讀者の参考に資す

周顯王四年

秦侯伯となる

孟子九歳の時

秦は支那の西北隅なる今の陝西省に辟在し周初夷狄を以て目せらる春秋時代より漸く頭を擡げ穆公の時西戎に覇たりしが今や進んで中國の侯伯となれり戰國時代合従連衡の活舞臺は將に之より始まらんとす

顯王十年

秦變法の令を定む

孟子十四歳の時

秦の孝公英邁の資を以て大に憤を發し刑名法術の學に通し峻刻精悍の方を備へたる商鞅を用ひ變法の令を定め富國強兵の實を擧げんとす是よ時勢の潮流甚急にして中原列國將に其渦中に沈まんとするを

顯王十六年

齊魏を伐て趙を救ふ

孟子二十歳の時

孟子生るゝ十四五年前田和齋を篡て君となる齊は今の山東省なり桓公天下を一匡せしより茲に至るまで三百餘年、覇圖熄むこと久矣、今や篡君の孫威王富強の威を以て中原に入り今の河南省内の魏を伐て今の山西省の趙を救ひ以て雄圖を桓公に接せんとす其勢力實に悔るべからず後二十餘年宣王の時に至り孟子齊に遊ぶ

顯王十八年

韓申不害を相とす

孟子二十二歳の時

申不害も刑名法術の士なり著書あり今は傳らざる秦は商子を用ひ韓は申子を用ふ、見るべし功利の學盛にして道德の説行はれざるを

顯王十九年

秦井田を廢す

孟子二十三歳の時

井田の阡陌を破りて地力を盡し民をして耕作に勉めしめ専ら國力を充實

せんとする野心寧ろ測るべけんや

顯王二十六年 伯を秦に致す 孟子三十歳の時

秦愈富強となり列國懼れて伯を秦に致せり

顯王二十八年 魏韓を伐つ、齊魏を伐つて韓を救ふ 孟子三十二歳の時

齊魏の力相匹し互に覇を争はんとするも、の如し他日孟子齊魏の間に歴

遊す其趣向又揣摩すべきなり

顯王三十一年 秦商鞅を殺す 孟子三十六歳の時

秦商鞅を殺すと雖も鞅の政策は永く富強の源となり其後百十六年にして

遂に天下を一統するに至れり

顯王三十五年 楚越を滅す 孟子四十歳の時

楚は今の湖北湖南に跨り周初荆蠻と稱せられしも春秋時代より漸く強大

となり秦晋と雄を競ひ今や越を滅して其疆域今の浙江江蘇等に達し隠然

秦と對立するの勢あり

顯王三十六年 六國合従す 孟子四十一歳の時

秦の勢愈強く諸侯其併吞を恐る周人蘇秦其機に投じて列國の諸侯に説き合従の策を爲す戰國社會の大波瀾之より起る嗚呼列國諸侯權數詐術の末に眩し徳政の貴を知らず遂に秦の滅ぼす所となる哀哉

顯王三十七年 蘇秦趙を去て燕に如く 孟子四十二歳の時

顯王四十一年 秦張儀を以て相となす 孟子四十六歳の時

張儀も蘇秦と同じく縦横の術を學びしが是に於てか秦に用ひられ連衡の

策を以て合従を破り遂に六國をして秦に服事せしめたり

顯王四十八年 齊の田文孟嘗君と號す 孟子五十三歳の時

孟嘗君食客三千人名聲諸侯に聞ゆ然れど只雞鳴狗盜の士を用ひて真材を

用ゐるを知らず惜むべし

慎靚王二年 孟子魏を去り齊に適く 孟子五十四歳の時

慎靚王三年 楚趙韓魏燕の五國秦を伐ち函谷關に戦ふ五國敗走す

孟子五十五歳の時

孟子五十六歳の時

孟子必讀講義 緒言

見るべし權詐の士遂に其終を克くせざるを  
慎靚王五年 秦司馬錯の計を用ひて巴蜀を取る

孟子五十六歳の時

巴蜀は今の四川省の地にして江山險固、沃野千里、天府の地なり、秦の之を取  
る寶庫を得たるに等し、國力益富強に趣き六國得て制する能はず

慎靚王六年

燕亂る齊伐て之を取る

孟子五十七歳の時

燕は今の直隸省の地なり、齊一たび燕を取りしも德を以て之を懷けず、燕復  
齊に叛く事孟子書中に見ゆ

報王元年

孟子齊を去る

孟子五十八歳の時

報王二年

燕太子平を立つ楚屈秦を伐つ

孟子五十九歳の時

報王三年

秦大に楚を破り漢中を取る(以下一々歳を擧げざりしは類推すべし)

報王四年

諸侯大に連衡を唱へ秦に事ふ

報王八年

秦韓の宜陽を拔ぐ

報王九年

趙民に軍事を教へ遂に中山及胡地を略す

報王十五年

秦楚を破る

報王十七年

齊韓魏の三侯秦を函谷關に破る、秦河東の三城を割て和す

報王二十年

趙、中山を滅す

報王二十一年

秦魏を敗る

報王二十二年

秦白起を用ふ、白起魏の五城を拔く

秦豊厚の積に據り強大の勢に乗じ將を撰ひ卒を鍊り中原に跋扈、跳梁を逞  
し以て一統の業を成さんとす

報王二十四年

秦韓を伐つ

報王二十五年

魏河東四百里を秦に與ふ

報王二十六年

孟子卒す

報王二十七年

秦の昭襄王、西帝と稱し齊を以て東帝となす

秦の勢力殆んど天下を一統するに近しと雖も齊の之を妨げんことを恐れ  
暫く東方を齊に委して根據を西方に鞏くせんとす、秦の策たる狡獪機敏と

云ふべし、後六十餘年にして秦六國を滅し皇帝と稱す。以上は孟子の幼時より終焉前後に至るまでの列國形勢の一斑なり。又孟子時代前後に於ける他の學者を擧ぐれば、管仲の流を汲む經濟家あり、申子商子の如き刑名家あり、蘇秦張儀の縱橫學あり、淳于髡の如き滑稽家あり、李悝は地力を盡すを以て教となし、許行は神農を假りて農家者流の説を主張し、老莊虛無恬淡の教あり、慎到田駢接子環淵の如きも黃帝道德の術に達すとす。天下の士大夫各其好む所に從て趨合し、議論紛々底止する所を知らず、殊に楊朱の爲我説、墨翟の兼愛説如きは尤も理に近ふして却て眞を亂らんとす。故に孟子力を極めて之を攻撃せり。然らば則ち孟子の大本領は如何、學術に於ては専ら孔子を祖述し、異端を剽削し、政治に於ては王道を尊崇し、覇術を卑賤せり。其氣宇識見傲然として一世を睥睨して、知を後の賢者に待てり而して孟子七篇の大精神は如何、仁義の二字に在り、其の利を黜くるは徒に利を惡むに非ざるなり、其仁義を害するを以てなり、然らずんば周易に元亨利貞と云ひ、尙書に正徳利用厚生と云ふ、大學に利其利と云へり、孟子豈に之を知らざらんや、孟子利の利を知る深し、故に利の弊を知る亦深し、且は齊宣梁惠の

如き天下紛爭群雄角逐の世に生れ、侵略攻戰の外に國家の要務あるを知らず、民は水火に苦み、士は鋒刃に斃るゝも吾は只尺寸にても境土を擴むれば貪婪無厭の欲を抱て自ら得々とし之が臣たるものも亦樂を助けて虐を遂けしめ、賊を佐けて盜を長せしむるの類のみ是を以て滔々たる一世の風俗、唯利を之れ視る、利の爲めには君臣の誼を忘れ、父子の親を忘れ、夫婦の和朋友の信も利の爲めには捨て、土の如く中國を擧げて夷狄となし、人類を擧げて禽獸となさんとす。際に當ては安んぞ大聲疾呼利なるものを排斥せざるを得んや。

宋の司馬溫公著はす所の資治通鑑に子思孟子の問答を記して曰く

初孟子師子思。嘗問牧民之道何先。子思曰。先利之。孟子曰。君子所以教民者。亦仁義而已矣。何必利。子思曰。仁義固所以利之也。上不仁則下不得其所。上不義則下樂爲詐也。此爲不利大矣。故易曰。利義之和也。又曰。利用安身以崇徳也。此皆利之大者也。

と而て溫公之を論評して曰く

臣光曰。子思孟子之言一也。唯仁者知仁義之爲利也。不仁者不知也。故孟子對梁王直以仁義而不及利者。所與言之人異故也。



學者善く斯の問答と評論とを玩味せば蓋思ひ半に過ぎん

孟子仁義の説に就き先儒曰く仲尼は只一箇の仁の字を説く孟子口を開けば便ち仁義を説くと殊に知らず仁義の説亦仲尼に基くを周易説卦傳に曰く

立天之道曰陰與陽立地之道曰柔與剛立人之道曰仁與義

次に孟子の特色とすべきは養氣の説なり所謂浩然の氣是なり次は性善の説なり先儒曰はく孟子性善養氣の論皆前聖未だ發せざる所と然れども細に其源委を尋ぬれば二者皆易に本くを見る周易坤の六二の條に曰く

直方大不習无不利

孔子文言傳に於て之を解して曰く

君子敬以直内義以方外敬義立而德不孤直方大不習无不利則不疑其行也

而して孟子浩然の章に曰く

其爲氣也至大至剛以直養而無害則塞于天地之間其爲氣也配義與道無是餒也是

集義所生者非義襲而取之行有不慊于心則餒矣

讀者之を對比玩味せば其言の相同じきを發見せん

性善の説の易に基くと云ふ所以は繫辭傳に曰く

一陰一陽之謂道繼之者善也成之者性也

先儒曰く孟子曰く以て仕ふべければ則仕へ以て止むべければ則止み以て久らすべければ則久らし以て速にすべければ則ち速にす孔子は聖の時なるものなりと故に易を知るものは孟子に如くはなしと其れ然り然りと雖も孟子の易を知るは豈只進退出處の際を論することのみならんや仁義養氣性善諸説皆易に基けるや明し矣

或人余を難して曰く果して子の言の如くならば孟子中屢詩書中の語を引て嘗て一語の易に及ぶなきは何ぞやと嗟易を知るものは易を言はず孟子巧に易理を應用して易の語を其儘に引かざるは是れ孟子の大に易に深き所以なり豈に膚淺の見を以て之を推測するを得んや

次は心の説なり孟子七篇中心を論ずる一にして足らず曰く是心足以王矣と曰く物皆然心爲甚と曰く無恒産因無恒心曰く我四十不動心と曰く心無忘と曰く生於其心害於其政曰く人皆有不忍人之心曰く能格君心之非曰く惻隱之心仁之端也云

々曰く理義之悦我心猶芻豢之悦我口曰く非獨賢者有是心也人皆有之賢者能勿喪耳曰く此之謂失其本心曰く仁人心也曰く學問之道無他求其放心而已矣曰く欲貴者人之同心也曰く天將降大任於是人也必先苦其心志曰く困於心衡於慮而後作曰く盡其心者知其性也曰く仁義禮智根於心とは其一斑なり以て孟子の心の工夫に於て頗る精密周到なるものあるを見るべし

孟子誠を説て曰く誠者天之道也思誠者人之道也至誠而不動者未之有也不誠未有能動者也と孔孟の教の萬世の人心を感せしむる實に斯の一片の誠に在るのみ岐趙題辭に曰く七篇二百六十一章三萬四千六百八十五字天地を包羅し萬類を揆叙し仁義道德性命禍福粲然所載せざる所なし又曰く孟子譬喩に長じ辭迫切ならずして意以て獨至ると韓愈曰く孟子の功禹の下に在らずと推尊亦至れりと云ふべし

(一) 仁義章 梁惠王上

孟子見梁惠王王曰叟不遠千里而來亦將有以利吾國乎孟子對曰王何必曰利亦有仁義而已矣王曰何以利吾國大夫曰何以利吾家士庶人曰何以利吾身上下交征利而國危矣萬乘之國弑其君者必千乘之家千乘之國弑其君者必百乘之家萬取千焉千取百焉不爲不多矣苟爲後義而先利不奪不饜未有仁而遺其親者也未有義而後其君者也王亦曰仁義而已矣何必曰利

字解 梁惠王魏の國は大梁といふ所に都を定む故に魏といはずして梁と稱す實は魏侯營のことなり此時の諸侯は僭越して王と稱せり惠王とは謚なり叟は長老の人を稱するなり先生といふがごとし利は朱子曰く國を富まし兵を強くするの類をいふなりと余竊に案するに國を富し兵を強くするは立國の要務にして孔子も食を足し兵を足し民之を信ずとて兵食の德義と相待つ所以を説き玉へり孟子は孔子の學を祖述したるものなれば富國強兵を度外視するの理なし只當時の諸侯酷刑暴斂民の膏血を絞りて多く兵甲を整へ徒

らに無名の師を興して敵國を侵略し以て虎狼の慾を逞うするを抑へたるのみ左れば茲に言ふ所の利は蓋し不義の利なり。亦はコレモマタの亦にて此時には蘇秦張儀などの人ありて諸國を歴遊して専ら利を説き天下靡然として其風を崇尚せり故に王は孟子を以て此徒に比して先生も亦吾が國に利益することを謀り呉れるかと問はれしなり。仁義の仁は心の徳なり愛の理なり詳かに訓解すれば浩瀚なるゆゑに其大要を解すれば博く公けに愛する心を仁といふ義とは心の制事の宜しきをいふとありて心に判斷をして此事は此の如く爲すべし此事は此様に取扱はねばすまぬと事々を都合よく條理に違はぬやうに取極むることなり今日義務といふことなどは此義の一端をいふなり而已矣。とは助語にて此語を置くは此事より外には道なしこればかりであるといふ時に用ふるなり。交征利とは上よりも下よりも互に利を征取することをいふなり。萬乘は師の時に用ふる車を萬個所有するをいふ即ち地方千里の國なり古は天子の畿内のみ千里四方なりしも戰國の時は大國の諸侯は皆千里の地を有せり車一を一乘といふ一乘には甲士三人歩卒七十二人

と馬四疋と附屬す後世一天萬乘の君と申すは天子畿内千里車萬乘の義より取る千乘は萬乘の國の卿執政にて領地百里四方車千乘を有せり百乘は千乘の國即ち戰國時代の小諸侯の國の執政なり是も領分の村より車百乘を出すなり。弑とは下たるものが上を殺すをいふ。兩下の殺すは弑といはず。嬰とは飽き足ることにて食の腹に滿るをいふなり。遺は忘れて遺し棄つることをいふ不急のものと心得るなり。

**講解** 孟軻氏は魏の惠王三十五年に當りて禮を厚くし辭を卑うして諸國より賢者を招聘す故に孟子も來りて惠王に見れしに惠王の曰はるゝは叟も千里の長途を遠しともせずして吾國に來らるゝ亦吾國に利益するの謀を爲すことあらんかと問はるゝによりて孟子對へて申すには王様は何ぞ必らずしも利といふことのみを申さるゝや亦仁義の道があるばかりである(利を専ら言ふ時は害ありて仁義を言へば利は其中にあるとの意味なり因りて利を言ふの害を先づ述べしなり)王様は何等の事を以て吾が國に利せんといひ其大夫(即ち王の大臣)たるものも何等の事を以て吾が家に利せんといひ士庶人(士農

工商たるものも何事を以て吾が身に利せんといふ時は上も下も交（相互）利を  
 征取せんとして弑逆篡奪の禍起り國は遂に危しと萬乗の國にて其主君を弑  
 し奉る人は誰あらう其大臣たる千乗の領地を有する人なり又千乗の國にて  
 其主君を弑する者は誰れあらう其大臣たる百乗の采地を有する人なり例へ  
 は足利將軍を弑したるは其大臣たる細川なり而して細川を弑したるは其臣  
 の三好なるが如し萬乗の内より千乗の領分を取り千乗の國にて百乗の領  
 地を取りたれば皆な主君の祿の十分一を有する故に不多とはせぬ（不多とは  
 少多とは  
 なり）隨分と多きものなり然るに苟も義の道を後にまはして利を先とするとき  
 は主君の物を奪ひ取り盡さねば（あまた）贖（あまた）ざるなり誠に利の害は恐るべきこと此の  
 此しと次に仁義を言へば利は其中にあるといふ意を述ぶ仁者は必ず其親を  
 愛するゆゑに仁にして其親を遺棄するものは、まだ無きなり義者は必ず其君  
 を大切にするゆゑ義ありて其君を後にして不忠を働らくものは、まだなきな  
 り故に人君たるもの仁義を行へば自然と其下たる臣民も之に感化せられて  
 君や親を大切に戴くによりて安泰なることを得るなり因りて王様も亦仁義

引用

とのみ仰せ有ればソレで済むのである何ぞ必ずしも利を曰ふことをせんと  
 深く王の利心を戒しめたるなり

此章は孟子七篇の綱領たる所にして當時侵略攻戰を専らとし人々唯利を之  
 れ競ひ仁義の道絶えんとす故に孟子は仁義を尊び利を黜くるを大宗旨とな  
 す是れ此の章の端首（はしめ）に置かるゝ所以なり仁義は人心の固有なる天理の公な  
 るもの利心は人欲の私（私）に出るゆゑに利を求むれば利を得ずして害を生ずる  
 ものなり程子曰く君子も利を欲せざるにあらずるも只専ら利を以て心とす  
 れば害あり惟た仁義を行へば利を求めずして利は却て得らるゝなりと故に  
 孟子仁義を言うて利を言はざるは時弊を矯正して萬世の爲に大堤防を築き  
 たるなり

**文法** 此一篇は君を道に引き入るゝ直諫の體にて王何必曰利亦有仁義而已  
 矣の二句を以て一篇の主旨とす故に結末に曰仁義而已矣何必曰利の二句を  
 以て昭應とす兩頭を以て中間を包むの法なり。王曰何以利吾國以下一段は  
 王の爲に利を防ぐが緊要なれば長く數十句を述べて仁義者の君親を敬戴す

るを簡短に述ぶ是れ一長一短の句法なり。征利而國危矣の而の字一字の幹旋にて下の數句を起す孟子七篇中の助字は用法精嚴なれば輕々視すること勿れ又征の字は征稅の征にして同じ取ると云ふ中にも強制的に取るの意を含む古文中字を用ふるの如何に巧妙なるかを見よ

(二) 牽牛章 梁惠王上

齊宣王問曰齊桓晉文之事可得聞乎孟子對曰仲尼之徒無道桓文之事者是以後世無傳焉臣未之聞也無以則王乎曰德何如則可以王矣曰保民而王莫之能禦也曰若寡人者可以保民乎哉曰可曰何由知吾可也曰臣聞之胡斨曰王坐於堂上有牽牛而過堂下者王見之曰牛何之對曰將以釁鐘王曰舍之吾不忍其殼觶若無罪而就死地對曰然則廢釁鐘與曰何可廢也以羊易之不識有諸曰有之曰是心足以王矣

字解 齊桓晉文とは齊の桓公と晋の文公とを謂ふなり此二君は五霸の中に尤も有名の人にて天子を挾んで諸侯に號令せし覇者の雄なり仲尼は孔子の字にて孔子名は丘字は仲尼と謂ふ保民の保は即ち保護愛育の意にてこれを安ずると訓む今の保母の保と全し意なり寡人は諸侯の自稱にて寡徳のも

のといふ意にて今の拙者といふも全し謙遜の辭なり胡斨は齊王の臣下にて胡は性斨は名なり釁鐘は新たに鐘(兵時用)を鑄たる時に性(即ち牛)を殺して

血を取り以て其鐘の鬻うりに塗るなり之を當時例として爲したるなり殺ころは牛の恐おそぢ懼おそるゝの容よう躰たいなり又一説には牛の鳴く聲なりといへど採らず有諸あはコレアリヤと訓む諸は之乎の二字を合せたる意にて助字に用ふ

**講解** 此章を解するには先づ王道と霸道との區別を了解せざる可からず王道とは眞實に仁義を行ひて人民を安全に治むる古の堯舜の如く民を愛育するをいふ霸道とは即ち齊の桓公晋の文公等の如く仁義を表面に假り行ひて民を欺たぶらしめて其實は己の野心を逞たくませんと謀るを専らとす譬へは王道は純金にして霸道は鍍金の如きものなり

偕ともて齊の宣王も霸道を行ひて先代の如く國を盛んにせんと心あり因りて孟子に問うて曰く昔時の齊の宣王や晋の文公の事跡を詳かに聞くことがてきるかと孟子之に返答するは孔子の徒ともにて聖人の道を學ぶものは桓公文公の霸道を卑ひしみて其事跡を道みちひ話すものはありませぬによりて後代に傳へたるものなきゆゑに臣みこ（孟子此時に齊の客卿）は未だ之を聞きたるとありませぬ御尋にて是非言へとのことならば王道をば述べまするである宣王

の申すには吾が身の徳が如何いかしたれば以て王たることができるかと孟子の曰く人民を保護愛育して王たれば之を能く禦おさぎ止めるものはありませぬ宣王曰く寡人の如きものにてても以て民を保安するとができるか孟子曰く可たまするとも王の曰く何事なにごとに由りて吾が身が可たまるといふことを知るや孟子の曰く臣は之を王の臣下なる胡こ斂れんと申すものに承うりましたと辭と改めて曰く王が或時に堂上に坐まされしに牛を牽ひいて堂の下を通過するものがありましたを王之を御覽じて申さるには其牛は何處どこに牽ひき行くやと牛牽の申にはこれは鐘か鑄か上りたるゆゑに將まささに之を殺して其血を塗らんといたすなりと王が仰おほせらるゝには其事は舍あてくれ吾は其牛が殺ころすとして何の罪もなきに死地に就つき殺さるを懼おそるゝの容よう躰たいを見るに忍しのび堪へられぬ牛牽が對へ申すには然らば鐘に覺おぼえることは廢止せんかと王の申さるゝには何なんとしてそれは廢止することあらん羊を殺して牛の代りに用ふべしとの事ありしと臣は識しりませぬが此様の事がありましたか王の曰く之は有りし事なり孟子曰く是の心あらば以て王道を行ひ天下の王となるには十分でござるなりと此首段に

て王に忍ひざるの心あらば民を保安して王を致すことは間違なく出来ると許すなり

【文法】此文章は一牛の上より説起して天下を平にする事に至る奇幻不可思議の文法是を側入筆法といふなり無以則王乎無以の以の字は已と音通にて已は止と訓するゆゑヤムナクバと讀む而して此の王の字は此一章の主腦とするあり臣未之聞也の一語を以て抑へて無以則王乎の一語を以て揚げたり是れ抑揚なり又此の王字に就て一轉して下の議論を起す此王一字の活動たるや誠に大なるなり保民の二字此一章の綱領となるのみならず又文章の一轉となる不忍の二字は一章の骨子孟子は王が吾不忍其穀觶若無罪而就死地の一句を捕捉して以下の反覆の議論を開き出す譬へは王は天池の濱に在る涸渴の龍の如きものなり之を引出して雲雨を起さしめ天上天下自由に飛騰せしめんとするも其龍を引出す手段の無かりしを此不忍の心を以て遂に之を引出したるなり是れより二段三段と説き重ねて自由自在にするは孟子の虚々實々の辨明法なり

百姓皆以王爲愛也臣固知王之不忍也王曰然誠有百姓者齊國雖編小吾何愛一牛即不忍其穀觶若無罪而就死地故以羊易之也曰王無異於百姓之以王爲愛也以小易大彼惡知之王若隱其無罪而就死地則牛羊何擇焉王笑曰是誠何心哉我非愛其財而易之以羊也宜乎百姓之謂我愛也曰無傷也是乃仁術也見牛未見羊也君子之於禽獸也見其生不忍見其死聞其聲不忍食其肉是以君子遠庖厨也

【字解】愛は吝といふ意にて愛惜のことなり愛憐の意に非ず編小は極めて小なことを謂ふ編はヲクヒというて衣服の最も小片なり隱は痛むといふ哀痛することなり擇は區別して分つこと牛を赦し羊を殺すは是れ牛と羊と區別せるなり無傷は百姓の言を以て王の心を傷め害ふことなかれといふなり仁術は朱註に術は法の巧なる者を謂ふとありて仁を行ふに巧なる方法なりと解すれど唯道と訓して宜しからん古文に術を道の意味に用ふる例多し其聲は將に死なんとして哀鳴する聲なり庖厨とは牛羊等を飼養する所を庖とい

ひ又之を宰烹する所を厨といふなり

講解 前段に是心が王たるに足れりと孟子は王の心を開揚して偕て曰ふには百姓は皆王の心は牛を愛惜して其費用を減省すると致すなれども臣(子孟)は固より王の心の忍びざる所あるを知ると王の曰く然り誠に百姓と申すものは致し方のないものである(誠)にとは之を鄙んずる言葉にして子誠(齊人也)などあるに同じ吾が齊の國は偏小なれども吾れ何として一牛を愛吝せんや吾は即ち其牛の穀糠として罪もなきに死地に就く若くなるを見るに忍びぬことである故に羊を以て牛に代へたるなり孟子又曰く王は百姓が王を以て牛を愛吝すると思ふを怪異とし驚くなかれ小なる羊を以て大なる牛に易へしめしなり彼の百姓は惡んぞ王の心知らんや王も若し其の牛が罪なくて死地に就くことを哀痛するときは羊も罪なきものなるに牛と羊と何故に區別せらるゝやと孟子難問を設けて王の本心に反省せしめんとするに王は其意を察せずして笑つて曰く是れ誠に何たる心に出てたるや我は其財錢を愛吝して牛に易へるに羊の廉價なるを以てする譯にてはなし宜なる哉百姓の

我は牛を愛吝せしと謂ふことゝ王も其本心に求め得ざるなり因りて孟子の曰ふには王は百姓の言を以て決して心を傷め害ふことなかれ是が乃ち仁を行ふ道なり牛の忍びざるは目撃せしも羊は未だ眼に觸れざるゆゑなり君子が禽獸に於けるや其生きたるを見れば其死するを見るに忍びず其悲しき鳴く聲を聞きたるときは其肉を食ふに忍びざるものなり故に君子は牛羊などを飼畜し割烹する庖と厨を遠隔の場所に設け造るなり是は平素より仁心を養成し仁を行ふの道を廣むる爲めなりといふ

文法 此第二段は王の王たるに足るは不忍の心に在る然して不忍の心が王たるに足るは善く推して擴充するに在り故に百姓皆以王爲愛の句を以て發難攻撃の端緒を開きたるなり 牛羊何擇此の一句を以て王の心を難問して見牛未見羊の一句を以て王の心を了解せしは實に孟子の論鋒自在なると云ふべし譬へは虎猛の項下に金鈴を繋けるが如し之を繋げ得るものならては解得がたし是乃仁術也の句を以て是誠何心哉の句に照應し見牛未見羊の句を以て牛羊何擇焉の句に照應する所最妙なり 是誠何心哉以下謂我愛也を



三節語と爲し以て王の自ら怪み自ら尤むるの意を十分に見はすなり  
 王、説曰、詩云、他人有心、予忖度之、夫子之謂也、夫我乃行之、反而求之、  
 不得吾心、夫子言之、於我心有戚々焉、此心之所以合於王者、何也、曰、有  
 復於王者、曰、吾力足以舉百鈞、而不足以舉一羽、明足以察秋毫之末、  
 而不見輿薪、則王許之乎、曰、否、今恩足以及禽獸、而功不至於百姓者、  
 獨何與、然則一羽之不舉、爲不用力焉、輿薪之不見、爲不用明焉、百姓  
 之不見保、爲不用恩焉、故王之不王、不爲也、非不能也、曰、不爲者、與不  
 能者之形、何以異、曰、挾太山、以超北海、語人曰、我不能、是誠不能也、爲  
 長者折枝、語人曰、我不能、是不爲也、非不能也、故王之不王、非挾太山、  
 以超北海之類也、王之不王、是折枝之類也、老吾老、以及人之老、幼吾  
 幼、以及人之幼、天下可運於掌、詩云、刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦、  
 言舉斯心、加諸彼而已、故推恩足以保四海、不推恩無以保妻子、古之  
 人、所以大過人者、無他焉、善推其所爲而已矣、今恩足以及禽獸、而功  
 不至於百姓者、獨何與、

字解

説は悦に同じ喜ぶなり 詩云は詩經の小雅巧言の篇の詩句を引くなり  
 忖度ははかりはかると訓す人の心に思ひあるを此方にて推量するを云ふ  
 戚々焉は心のシクシクと動くを形容するなり前日の不忍の心が又動く  
 を云ふ 復於王は王に申告するを云ふ 百鈞は至て重き量目なり一鈞は三十  
 斤なれ百鈞は三千斤なり 一羽は一枚の鳥の羽を云ふ至て輕きなり 秋毫之末  
 は秋の獸の毛は脱換する頃なれば至て細きものなる其毛末の小にして見難き  
 ものを云ふ 輿薪は車に積み載せたる薪を云ふ是は大にして極めて見易きも  
 のなり 形何以異は爲ざるものと能ざるものとの形狀は如何の差異あるかと  
 云ふ 挾太山は太山といふ齊今の山東省の泰山にて至極巨大なる山岳を腋  
 の下に挟むを云ふ 超北海は北の海を今の渤海灣躍りて飛び越ゆるを云ふ折  
 枝は長者の命によりて草木の枝を折ること又陸氏の説には腰枝を折ること  
 にて今の拜揖を云ふとあり枝は肢に通じ用ふるなり又趙氏は按摩手節を折り  
 罷枝を解くなり少者は役を耻ぢて爲さざるのみとあり孰れに見てもよろし  
 唯長者の爲に聊の骨折を爲すとの意なり 老吾老は吾老は我の父兄を云ひ

老とするは老人として事へまつるを云ふ吾幼吾幼は吾幼者なる子弟を云ひ幼とするは幼者として愛育するを云ふなり 運於掌は自分の手のひらにて物を運轉するに於て至て易きとを云ふなり詩云は詩經の大雅思齊八章の中の詩句を引くなり 寡妻は徳の寡き妻と云ふて謙遜したる辭なり 御子家邦は家や國を治ることなり御は馬を治ることをいふより起りて治ると訓す 推恩は恩愛を推し廣むることを云ふなり

講解 王は孟子の辯明せらるゝ仁の術なることを聞て大に説びて曰くなるほど詩經にも云へる他人の心に思へることあらば予れば之を付度推量するとは即ち夫子孟子を斥すのことを謂ふなり夫れ我れは牛を殺して羊を殺せることを行ひながら反て之を考へ求むるに吾が心において合點するを得ず夫子の言に因りて前日の不忍の心が今日復た感々焉として動き起りたり此心が王道に合ひ適ふとは如何なる所以なりや 孟子茲に於て一の譬を以て王を曉すには王に復し述ぶるものありて曰く吾が腕力は百鈞の量目を擧るに足るも一枚の鳥羽を擧るに足らぬ明察は秋の

獸の毛の末の細き銳きものを察し見るに足りて輿に積みたる薪の大なるものを見ることのできぬと云ふを王は之を可として聽許さるゝや 王の曰はるゝには否とよ許るされぬなり孟子の言ふは今日王の恩意は禽獸（即ち牛）に及ふに足りて而して仁愛の功が百姓の身上に及び至らざるは獨り如何なるゆゑか然らば則ち一羽の擧らざるは力を用ゐざる爲にて輿薪の見えざるも明察を用ゐざる爲なり百姓が保安せられざるは恩意を用ゐざる爲なり故に王の天下の王たらざるは力を用ゐて爲さざるなり力を用ふるも爲し能はぬてはなしと云ふ 王又問て曰く爲さざるものと能はぬものとの状況は如何なる差異があるかと 孟子又比喻を以て答へて曰く太山を腋の下に挟み北海を超越せんに人に語りて曰く我は能はぬと是は誠に能はぬものなり年長の人に命ぜられたる爲に木の枝を折らんとして曰く我は能はぬとは爲さざるなり能はぬに非るなり故に王の天下に王たらざるは太山を挟み北海を越ゆるの類にあらずして年長者の爲に枝を折るの類である決して難事に非ず恩を推し廣むると推し廣めぬとによりてなり吾が家の父兄の老い

たるものを長老として敬ひ事へ以て他人の父兄に其心を推し及ぼし吾が家の子弟の幼きものを幼稚とし之を愛育するの心を推し廣めて他人の幼稚者に及ぼしさへすれば天下を自由に統御することは一物を掌上に運轉するが如く自由自在なるべし又詩經に云へるは文王が身を脩めて寡妻(文王の)に摸刑トとなり推して文王の兄弟に及ぼし至り以て家も邦も治むると是は斯心(吾老を老とし吾幼を)を挙げ擴めて之を彼の他人に加へ施すばかりである故に恩意を廣むる時は四海天下を保安するに足り恩意を推廣めざれば以て妻や子も保安することがならん古の人が大に凡人に超過するの徳行ありとする所以は他事なし善く其の爲す所を推し擴める而已ト矣であるなり今や王の恩は以て禽獸に及ぶに足りて而し功が百姓の身に及び至らざるとは獨り如何なることぞやと再三王の心に反求せしめんとするなり

**文法** 是の一節を第三段とす而して王説云々の一節は前後を過渡するの一帙なり威々焉ト以上を以て上を結び此心以下を以て下を起す 有復於王以下の比喩は王をして推恩せしめんと是れ空中の閃射なり是の如くならざれば事

情透徹せず提醒も亦靈ならざるなり是れ孟子が辯明の善く巧みなる處なり今恩足以及禽獸云々の一句は緊切に王を難問する處にして乃ち一章の警策なり故に又後句に至り重ねて此語句を以て照應して緊しく王に反省して心に求めしむるなり 及人之老及人之幼と兩の及の字を以て推の意を明らかにするなり詩云上に王が詩經を引證するゆゑ孟子亦詩云を引用する敏捷と云ふべし 斯心の二字は上の此心の二字に照應するなり

權然後知輕重、度然後知長短、物皆然、心爲甚、王請度之、抑、王興甲兵、危、士臣構怨、於諸侯、然後快於心、與、王曰、否、吾何快於是、將以求吾所大欲也、曰、王之所大欲、可得聞、與、王笑而不言、曰、爲肥甘不足於口、與、輕煖不足於體、與、抑爲采色不足視於目、與、聲音不足聽於耳、與、便嬖不足使令於前、與、王之諸臣皆足以供之、而王豈爲是哉、曰、否、吾不爲是也、曰、然則王之所大欲、可知已、欲辟土地、朝秦楚、莅中國、而撫四夷也、以若所爲、求若所欲、猶緣木而求魚也、王曰、若是其甚、與、曰、殆有甚焉、緣木求魚、雖不得魚、無後災、以若所爲、求若所欲、盡心力而爲之、後

必有災、曰、可得聞、與、曰、鄒人與楚人戰、則王以為孰勝、曰、楚人勝、曰、然則小固不可以敵大、寡固不可以敵衆、弱固不可以敵彊、海內之地方千里者九、齊集有其一、以一服八、何以異於鄒敵楚哉、蓋亦反其本矣、今王發政施仁、使天下仕者皆欲立於王之朝、耕者皆欲耕於王之野、商賈皆欲藏於王之市、行旅皆欲出於王之塗、天下之欲疾其君者、皆欲赴愬於王、其若是、孰能禦之、

【字解】

權は、ハカリのことにて輕重を區別する稱錘のとなり、度は、モノサシのことにて長短を量るを云ふ、甲兵は甲冑を着け兵器を荷ふの戰士を云ふなり、

構怨は敵國と怨を結び構へるを云ふ、諸侯は古の大名のとなり、肥甘は肥えたる肉にて味の甘きを云ふ美味のとなり、輕煖は輕き衣服の暖かなるもの美服のとなり、采色は奇麗なる色彩あるものにて即ち宮殿の美飾や其他目に觸るゝ美色のとなり、聲音は音樂のとを云ふ、便嬖は近侍のものゝ起居輕便にして君主の寵幸を受るものなり、辟土地は土地を開拓するを云ふ、莅中國は天下の中央なる國に君とし臨むを云ふ、撫四夷は四方の夷狄まで

も吾手にて撫育するとなり、朝秦楚は秦や楚の國を來朝せしむるを云ふ、若は如此と同じ鄒人楚人は二國の人を云ふ鄒は至て小なる國にて楚は大なる國なり、蓋亦反其本矣の蓋は盍と同じ、何ぞと訓むべし古は盍と盍と相通用す禮記の檀弓に、蓋言子之志于公乎とありて是亦何ぞと訓むべき場合に用ふ、朱子は普通の讀方にて「ケダシ」と解したれとも前後の文例にて「何ぞ」の方よろしと思はる、商賈は商人のことにて行商を商と云ひ家に居て商賣するを賈と云ふ、欲疾其君は其國の民が君の暴政を苦み他國の仁君に服せんとして吾君を疾み惡むなり此の欲の字は或説に衍字にて上下に欲の字、多く用ひある故に誤て竄入せりと爲せり又勢を察するに欲の字を省くを可とす、王之塗は王の管内の道路を云ふなり

【講解】

此の第四段は王の心の牛を愛して民を愛せざるを咎めて其本に反らんことを勸むるなり權衡ありて物の輕重を知り度尺ありて物の長短を知るが心を以て物を量るほど甚だ難きものはなし牛を愛するの心は長くして重くあるべき民を愛するの心は軽くして短くあるべきや王にも之を量りて區

別せんことを請ふなり抑(サテマタ)と語を一轉して王は甲兵を動かし興して士臣を危害の地に陥いれ讐怨を諸侯の國々と結ひ構へて後に王の心に愉快なるや 王の曰く否やとよ吾は何として是を愉快とせん將に以て吾が大に欲し望む所を求めんとするなりと 孟子の曰く王の大に欲し望む所は承り聞くのが得らるゝやと問ふ 王は笑て言はざるなり 孟子又曰く王の欲望する所は肥甘の美味が口に十分足らざる爲なるか輕暖の美服が躰に十分足らざるゆゑか抑、采色の奇麗なる者が目に視るに足らざる爲なるか音樂が耳に十分に足らざるゆゑか便嬖なる近侍の伶俐なるものが王の御前に足らざるゆゑか此等の物件は王の諸臣において皆十分に之を給供せるゆゑ王は豈に此等の欲望てあるまいと 王の曰く否吾は是等の爲ならず 孟子曰く然らば王の大に欲し望むことは推察することができる土地を開拓して國を廣くし秦や楚の國の王を來朝せしめ天下の中央に莅(のぞ)みて四方の夷狄までも撫服せんするが王の欲望ならん此の若くの所爲を以て此の若きの欲望を求むるは譬へは猶ほ木上に攀縁して魚を得んと求むるがごとくである到底得らる

ゝとはなしと 王驚きて曰く是の(木に縁り魚を求め指す)若く其れ甚きか 孟子曰く殆んと焉(よ)よりも甚しきものである木に縁りて魚を求めば魚を得ずと雖も後日の災害は無し然るに此の若きの所爲を以て此の若くなる欲望を満たす時は心と力を盡して之を爲すも後日に必ず害災あるなり 王の曰く其れは承るとが得らるゝやと 孟子又比喩を以て之を曉すには鄒人と楚人と戦争すれば王は以て孰れが勝利を得るものとするか 王の曰く楚人が勝利ならん 孟子曰く然らば則ち小國は固より以て大國に敵するとはならず人數の寡少なる者は固より人數の衆多なるものに敵することはならぬ弱國は強國に敵することとはならん今や海内の土地千里四方の面積あるもの九ヶ國なり(九ヶ國とは齊、楚、燕、秦、趙、韓、魏、宋、中山なり其内にて中山は秦楚などに比較して小なれば同じく千里とは言ひ難けれど大概に言ふなり)齊は一國の地を集めて方千里あるゆゑ天下九分の一を有するなり一國を以て他の八國を屈伏せんとするは何を以て鄒が楚に敵するに異ならんや何ぞ亦たその根本に反らざるやと(老父藍田曰く發政施仁は天下に王たるの本なり一牛に忍びざるは又其

の本なりと今王も政治を發作して仁道を施し天下の仕官するものは皆王の朝廷に立て政を爲すを欲せしむ賢材を用ゐる姦邪を退くを以てなり耕作の農民は王の野に耕さんと欲せしむ租税の輕減するを以てなり商賈の人々は皆王の市内に住居せんと欲せしめ行旅の人も王の管内の道路に出んことを欲せしむ天下の民其主君の暴政に苦み君を惡みて其君を討伐せよと王の所に赴きて告訴せんと欲せしむ是の若く人心が歸したるときは熟れが能く之を禦き止むるものならん

**文法** 權度の一節を説くものは物と人と倒置すべからざるを言ふて而後に倒置する所以を説き起すなり 抑王一節は此一章の文意斷んとして又續く所謂水窮て山起るの法なり 快於心歎前の不忍の字に照して快の字を下して妙なり曰爲肥甘云々以下五句同句調を以て文の波瀾として王の欲望は此五件ならざるを知りて故さらし之を詰り末に至り土地を辟き秦楚を朝せしむ等の王の大欲を難ずる所文字の起伏神聲不可測にして齊王をして知らず識らず穀中に入らしむる所實に巧なるものと云ふべし 後必有災の災字を以て王

の雄心を灰滅せしめ之を挽回して本に反らしめんとす亦妙也 蓋亦反其本矣此一句を以て上を結び下を起す 皆欲立云々以下五の皆の字を用ふるを韓退之が上宰相書に學びて作れり 孰能禦之此禦の字は章首に在る莫之能禦の字に照應せり文法此に至りて一收結とし下文又別起すと云ふ譬へは龍を穴より引出して此一段は大に變化の術を爲さしめて是により天上せしめんとする所なり

王曰吾惛不能進於是矣願夫子輔吾志明以教我我雖不敏請嘗試之  
日無恒産而有恒心者惟士爲能若民則無恒産因無恒心苟無恒心  
放辟邪侈無不爲已及陷於罪然後從而刑之是罔民也焉有仁人在  
位罔民而可爲也是故明君制民之産必使仰足以事父母俯足以畜  
妻子樂歲終身飽凶年免於死亡然後驅而之善故民之從之也輕今  
也制民之産仰不足以事父母俯不足以畜妻子樂歲終身苦凶年不  
免於死亡此惟救死而恐不贍奚暇治禮義哉王欲行之則盍反其本  
矣五畝之宅樹之以桑五十者可以衣帛矣雞豚狗彘之畜無失其時

七十者可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>食<sub>レ</sub>肉矣、百畝之田勿<sub>レ</sub>奪<sub>レ</sub>其時、八口之家可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>飢矣、謹<sub>レ</sub>庠序之教、申<sub>レ</sub>之以<sub>レ</sub>存<sub>レ</sub>悌之義、頽<sub>レ</sub>白者不<sub>レ</sub>負<sub>レ</sub>戴<sub>レ</sub>於道路矣、老者衣<sub>レ</sub>帛食<sub>レ</sub>肉、黎民不<sub>レ</sub>飢不<sub>レ</sub>寒、然而不<sub>レ</sub>王者未<sub>レ</sub>之有<sub>レ</sub>也、

**字解** 吾<sub>レ</sub>憚<sub>レ</sub>は吾の智識が昏昧なりと云ふ 進<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>の是の字は上段の政を發し仁を施すとを指すなり 輔<sub>レ</sub>吾<sub>レ</sub>志<sub>レ</sub>は其志の及ばざる所を啓き迪<sub>レ</sub>くを云ふ 不<sub>レ</sub>敏とは吾心の敏悟ならざるを云ひて鈍なるものと云ふが如し 恒<sub>レ</sub>産<sub>レ</sub>は常々平生の生業を云 恒<sub>レ</sub>心<sub>レ</sub>は人々常に有る所の善心を云ふ 放<sub>レ</sub>辟<sub>レ</sub>邪<sub>レ</sub>侈<sub>レ</sub>は心の不正なることにて之を區別して云ふときは放<sub>レ</sub>は始て道理に離れたるを云ふ 辟<sub>レ</sub>は心の偏頗にして惡に浸し淫るを云ふ 邪<sub>レ</sub>は心の邪曲にして惡となりたるを云ひ 侈<sub>レ</sub>は慾に縱横と肆<sub>レ</sub>ま<sub>レ</sub>なるを云ふなり 罔<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>は人民の恒産を無くして罪を犯すに至りらしめて之を刑するは魚を網に入る如きもの故に民を罔すると云ふ 罔は網に同じきなり 仰<sub>レ</sub>足<sub>レ</sub>云々は父母に事る故に仰と云ひ 妻子を畜ふは俯すと云ひしなり 終<sub>レ</sub>身<sub>レ</sub>は久しきを言ふ此にては其歳一年位(周年)と見て可なり 一生涯と云ふことに非ず豈に一生涯一年の豊凶にて一生涯飽き一生涯苦

むと謂ふとあらんや論語に「子路終身誦之」とあり荀子に「國終身無<sub>レ</sub>故」とあり春秋左氏傳に「爲<sub>レ</sub>羈終世」とあり孰れも唯其久きを意味せり 奚<sub>レ</sub>暇<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>禮<sub>レ</sub>義<sub>レ</sub>の禮義を修行するの暇はあらずと云ふ治の字は「オサマル」と云ふときは平聲(平字)となり「ヲサマル」と云ふときは去聲(仄字)なりと此は平聲なり 五<sub>レ</sub>畝<sub>レ</sub>は君上より一夫に賜はる宅地にて二畝半は田にあり二畝半は邑に在り合せて五畝となるなり 雞<sub>レ</sub>豚<sub>レ</sub>狗<sub>レ</sub>彘<sub>レ</sub>とは雞と豚と狗食物とと彘は小豚なり 其<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>とは畜類の孕み又は子を守<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>み<sub>レ</sub>育<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>なり百<sub>レ</sub>畝<sub>レ</sub>は一夫に賜はる公田の區域内の一區の田なり其<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>は農作の耕耘の時なり八<sub>レ</sub>口<sub>レ</sub>は上農夫の家族を云 庠<sub>レ</sub>序<sub>レ</sub>は學校のことを云ふ 夏<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>には學校を庠と云ひ 殷<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>世<sub>レ</sub>には序と云ふ 申<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>は人民を學校に教ふるに孝悌の道を反覆して丁寧<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>論<sub>レ</sub>する<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>なり<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>重<sub>レ</sub>ぬ<sub>レ</sub>ると<sub>レ</sub>訓<sub>レ</sub>する<sub>レ</sub>なり 頽<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>髮<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>黒<sub>レ</sub>白<sub>レ</sub>相<sub>レ</sub>半<sub>レ</sub>する<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>い<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>五<sub>レ</sub>十<sub>レ</sub>以下<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ<sub>レ</sub>なり 負<sub>レ</sub>戴<sub>レ</sub>とは物を脊に負ひ又は戴くとを云ふ 黎<sub>レ</sub>民<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>頭<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>黒<sub>レ</sub>き<sub>レ</sub>壯<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>者<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>ふ

**講解** 此を五段として孟子は王道を述べて齊王に勸むる所なり齊王の曰く吾は智識が昏昧なるゆゑに是の政を發し仁を施すの地位に進むことがむつ

かし願くは先生吾の志望を輔け迪たひきて明白に我を教へ給へ我は不敏なる鈍才なれども請ふ之を試こころみ嘗かせんと 孟子曰く人民は常の産あるを第一とする恒の産なくして恒定まる善心の有るは士たるものゝみ能くするものなり人民の如きものは則ち恒産無ければ因りて恒心も無くなるものなり苟も恒心が無きときは放辟邪侈とて道理に叶はぬ行爲もかまはずしてせぬといふことなく終には罪科に陥るに及ぶ然る後に其罪に従つて之に刑を加へるとは是れ民を網に入れて取り殺すなり焉いづくぞ仁人が位にありて民を網に入れて取り殺すことを爲す可きぞや是故に賢明なる君主は人民の恒産を制して必ず仰いては父母に事へ奉るに十分ならしめ俯しては妻子を養ふに十分ならしめ樂歲なる豊作には終年飽き満ち凶年なる饑饉にも死亡の患は免るゝことができて然る後に人民を驅り逐ひ立てゝ善道に向ひ行かしむ故に民は上の命に従ふことが容易なりといふ所謂食足りて禮節を知るの意なり 今日人民の産を制するに其宜きを得ざるのみか租税を課すること重きゆゑに仰て父母に事へ俯して妻子を畜ふとができぬ樂歲さへも終年の苦みあ

り又凶年には死亡を免るゝことができぬ。此によりて惟だ死を救ひ免るゝに力の贍たらざることを恐るなり奚ぞ禮義などを修め行ふの暇あらんや王にあいても仁政を行はんと欲せば則ち盍なぞ其根本なる民の恒産を制するの所に反りて求めざるやと孟子は是より制産の法を述べ  
五畝の宅地に樹るに桑を以てし蠶を養へば年五十以上の者は以て絹帛を衣ることができる雞豚狗彘の畜養に其の乳孕の時を失なはざれば年七十以上の者は肉が食へる禮記に五十は帛に非れば暖かならず七十は肉に非れば飽かずとあり又百畝の田を一夫に與へて其耕作の時に徴發して人夫等に使はざれば家族八口もある上農夫にても飢るとは無かるべし庠序學校の教を謹みて之に申ね重ねて孝悌の道を説き曉せは頽白なる老人は道路に物を負戴せずして年老者は帛を被て肉を食ひ壯者なる黎民も飢ゑず寒ひやゑずして然して後ち天下に王たらざるものは未曾有の事であると此の如くすれば必ず王たる事が出来ることなり

**文法**

孟子辯論の巧なる王をして笑はしめ又悦ばしめ又笑つて言はざらし



二八  
め又此の吾惜うして進む能はずと言はしむ是皆精神を鼓舞するの所なり  
仁人在位の仁人は上段の不忍の字照應するなり 焉有は下の十字を管せり  
明君制云々は一正の筆にして今世制云々は一反の筆なり 庠序之教は上  
の驅而之善の照應にして衣帛食肉の二句は仰足云々俯足云々の二段に相應  
するなり 此一章は保民の二字に起り保民の術制産の法を述べて一東して  
王の天下に王たるの志を得せしむるを以て結ぶ千里の來龍回翔變化此に至  
りて九淵の穴に入らしめたるといふべし

(三) 雪宮章 梁惠王下

齊宣王見孟子於雪宮王曰賢者亦有此樂乎孟子對曰有人不得則  
非其上矣不得而非其上者非也爲民上而不與民同樂者亦非也樂  
民之樂者民亦樂其樂憂民之憂者民亦憂其憂樂以天下憂以天下  
然而不王者未之有也

字解 雪宮は齊王の離宮にして昔景公が晏子と問答せしも此所なりと云  
ふ 樂は音洛と云ふたのしむと訓す音樂のときは音韻といふ

講解 此時は王大に孟子を信じ擧げて客卿となし離宮を以て其の館舎に充  
て自ら來りて孟子に見れしなり王の賢者を優遇する亦至れりと謂ふべし  
て王の曰く賢者にても亦此の如き庭園泉石の樂みあるやと問ふ 孟子の曰  
く有ます人たるもの皆此樂みの心は有るものなりとの意なり然し人君たる  
もの民と樂を同くせず己れ獨り樂むのみにて人々此樂を得ざる時は則ち其  
の君上を非として譏るの心あるなり而して下たる人民が此樂を得ぬと云う  
て上を非とする者も非なり其分に安んぜざるゆゑなり又人民の上になつて

人民と樂を同じくせざる者も下を郵ゆうまざるゆゑに非なり是は皆道理にあらざるなり人君となりて民の安穩にして樂むを樂とする者は民も亦君の樂ませらるゝことを樂しみとする人君が民の憂とすることを君も憂とせらるゝ時は人民も亦君の憂とせらるゝことを以て憂とするなり此の如く樂むには天下一般上下共に樂しみ憂るにも上下共に憂ると云ふ君民一致して然して天下の王たらざる者は未だ之れ有らざることなりと孟子は樂を同じくすることを勧めしなり

昔者齊景公問於晏子曰吾欲觀於轉附朝儻アソビ遵海アソビ而南放於琅邪アソビ吾何修而可以比於先王觀也晏子對曰善哉問也天子適諸侯曰巡狩巡狩者巡所守也諸侯朝於天子曰述職述職者述所職也無非事者春省耕而補不足秋省斂而助不給夏諺曰吾王不遊吾何以休吾王不豫吾何以助一遊一豫爲諸侯度

**字解** 晏子は齊王の臣にして賢人なり名は嬰と云ふ 轉附朝儻は昔山の名にして景色の佳なる所なり今の山東省の沿海岸景公傳に曰く轉附は乃ち太

晏子

公の墓にして武陵なり朝儻は桓公の墓にして所謂穆陵是なりと 遵海は海邊に従ひ沿ひて行くことを云ふなり 琅邪は齊の東南に當る境上にある邑の名なり 觀は處々を遊覽して土地人情等を視察するなり 何修は如何なる徳を修め行ふと云ふ意なり 適諸侯は天子が諸侯の國へ行き向はるゝを云ふ 所守は諸侯の守り居る所を云ふ 朝於天子は諸侯が天子に參朝することを云ふ 述所職は諸侯の職掌とする治民の事件を天子に上奏するを云ふ 補不足は春の耕を省察して穀種などの不足あらは之を補ひ足すを云ふ 省斂而助不給は秋の收斂を省みて其收穫に力の給ざるあらば之を助けしむるを云ふ又一説には收穫米の食養にも足らざるあらば之を補助するとの事を云ふなりとあり 夏諺は夏の世の世俗に云ふ言なり 不豫は樂しまざればなり 諸侯度は天子の恩惠が諸侯の法則となり諸侯も其下民を慈惠するとなり

**講解** 孟子は雪宮に在りて昔し景公と晏子とが問答されし所なるを以て即ち其問答の事を引いて宣王に答へしなり偕て昔し景公が晏子に問はるゝは吾

れ轉附と云ふ山又朝僻と云ふ山に游觀して海邊に遊がひて南の方瑯邪なる地まで至らんと欲するが如何なる徳を修めたらば以て先世の王者の遊觀に比較するを得べきやと晏子對へて曰く至極結構なる御尋にて候ふと晏子は景公の間を稱賛して偕て曰ふには天子が諸侯の守れる國に行き向はるゝを巡狩と云ふ巡狩と云ふ意味は守る所を巡視すると云ふ事なり諸侯が天子に朝參するを述職と云ふ述職とは諸侯の天子に受る所の職務を朝廷に上奏するといふことなり皆な事無くして空しく行くてはなほ春は郊野に出て耕作するを見て其穀種の足らざるを補ひ足し秋は收穫を省みて其力の給らざるを補助せらる夫れ故に夏の時の諺にも云へり吾王が遊ばざる時は吾等は何を以て休息せん又吾が王が豫まされば吾等は何を以て助からんと天子の一遊一豫さるゝが諸國の法則となりて諸侯も亦恩惠を其國內の民に施すよふになると云ふなり

**文法** 此一章は前段に立論し後段に引證するの文法にて孟子七篇中の變體なり乃ち前段とは未之有也までを云ひ後段とは昔者齊景公より爲諸侯齊ま

てを云ふ即ち引證に入るなり直に古書を引て一字を添へず文流暢ならざれども亦自ら典雅也

巡狩者巡所守也此一句を註解の文と云ふ述職者述所職也此句も亦然り無非事者此一句にて上を結びて下を起すなり

今也不然師行而糧食飢者弗食勞者弗息嗚々胥讒民乃作慝方命虐民飲食若流流連荒亡爲諸侯憂

**字解** 今也とは晏子の時をいふ 師行は朱註には軍衆の行進する意に取り師は二千五百人なりと態々解釋せり 從て糧食の義も朱註には糗糒の屬を謂ふとあり糗は乾飯の屑にして糒は乾飯なり古へは軍の糧食は飯を蒸し乾して畜へ携へしなり師行を軍隊の行進することゝすれば糧も糗糒とする方當然なれど予の考にては師行而糧食とは大勢の供廻りを引き連れて人民より酒食を徵發し田舎に醉飽してあるく事なり必しも師を二千五百人と説き糧を糗糒と説くに及ばず朱註に春秋傳の君行師從とあるを引くは誤てりそは人君國境を出る時の事にして國內巡回の場合に適用すべからず 嗚々胥

讒は人民怒を含み朋々と目を側たて相互に上の事を誹謗することなり。作  
慝は怨み悪むの心を起すを云ふ即ち民が其勞に堪へかねて上を怨むをいふ  
なり。方命は王命に逆ひ違ふを云ふ凡そ物圓なれば則轉して行き方なれば  
則格して止る故に詔令を廢格する義に取る。虐民は民を暴戾に取扱ふを云  
ふ。如流は飲食する水の流れて窮りなきが如くなるを云ふ。流連荒亡は解  
義下に詳かなり。

講解 今は然らずして多數の人を召連れて酒食に酔飽し農民を疲敝せしむ  
るゆゑに飢えたる者も食ふこと能はず勞働する者も息ふこと能はず朋々と  
して目を反して背互に上を讒謗し人民乃ち上を怨み慝ひの心を作す今の諸  
侯は皆王の命令に逆らひて人民を暴虐し飲食することは水の流るゝが如く  
窮り止むことなし而して甚た不品行を極めて流連荒亡の惡業を爲して實に  
諸侯の憂苦を爲すことであるなり此處に云ふ爲諸侯憂の諸侯は附庸の國侯諸  
の内にては天子に朝する資格なく、縣邑の長、縣邑を治むる目附奉行の如  
大諸侯に諫屬して天子に朝する資格なく、縣邑の長、縣邑を治むる目附奉行の如  
のきを謂ふ。

文法 此一節は上の夏賦を受け四言の韻文を用ひて辭を成し古色掬すべし  
犀利快暢の辯論多き内偶此の高雅の文字なかるべからず如何に孟子の詩的  
思想の豊富なるを見よ用韻は食息慝流憂と蹈み夏諺の遊休豫助度と蹈みた  
るを承けて妙甚

從流而下而忘反謂之流從流而上而忘反謂之連從獸無厭謂之荒樂酒  
無厭謂之亡先王無流連之樂荒亡之行惟君所行也景公說大戒於  
國出舍於郊於是始興發補不足召太師曰爲我作君臣相說之樂蓋  
徵招角招是也其詩曰畜君何尤畜君者好君也

字解 從流下は舟を浮べて水流に従ひ任せて下るを云ふ。從流上は舟を挽  
きて水流に逆上るを云ふ舟遊に耽ることなり。從獸は田獵して禽獸を逐ひ  
射ることなり。樂酒は飲酒に耽けることなり。景公說の說の字は悦と全し  
意なり古人は說悦と通し用ふ故に說の音悦とあり。戒於國は國內の人民に  
布告を出して戒勅せしむるなり。舍於郊は野外に宿舎して自ら身を責めて  
以て民を省みるなり。興發とは倉庫を開發することを興して救米を出すな

り太師は樂官の長を云ふ 君臣相説は景公と晏子と相和悦するを云ふなり 徵招角招は音樂の聲に五ツあり宮商角徵羽といふ徵の聲の招と角の聲の招との二曲を作りたるなり 畜君何尤は晏子が景公の欲を止むるは何も咎むるに及ばんと云ふことなり

講解 此一段は上句の流連荒亡を直ちに解釋して君を諫むるなり今の君は唯遊樂に耽ける舟を水流に浮べて下りて反ることを忘却して樂しめるを流と云ひ又舟を挽きて水に溯りて後へ反すことを忘却して樂しむを連と云ふ又禽獸を逐射して猪狩を樂しみ厭飽ことを知らぬを荒と云ひ飲酒に耽りて飽くことなく時を失ひ事を廢し遂に國家を喪ふを亡と云ふ先世の賢王は流連の樂しみや荒亡の行は決して無き也因て近時の弊政と先王の善法と此の二つの中にて唯た君が行ふ所に任すと云へり 景公は大に悦びて大に國內の民に告げ戒しめ宮中を出て近き野外に舍りて民の苦を察せらるゝのみならず是に於て倉庫を開きて米を出して民の不足を補助し太師なる樂官の長を召して曰く我が爲に君と臣とが相悦ぶの樂を作れよと蓋し今日に存する

徵招角招が即ち是なり其音樂の詩に曰く君の欲を止むるは何も咎むるには及ばん君の欲を止むるは君を愛好するの心より起るものなり 孟子の意は君と民と貴賤同じからすと雖も然れども其心は同じければ上下共に憂ひ共に樂しむ時は國家治平なることを深切に述るなり

文法 流連荒亡の四字は上句に於て解せず直ちに下句に就て解する之を金蟬脱殻の法と云ふ即ち蟬の脱殻にて上句は死して下句に活動するなり 惟君所行の一句を以つて先王の遊觀と今時の遊觀とを結合せるなり 畜君者好君也の句も晏子の語とすと山陽氏は之を評して孟子は結文に一語を下さるは子輿氏の家法なりと又一説には此句を以て孟子の言とすと乃ち是が蜻蜒の水に點ずるの法なりと余想ふに孟子此公案を引て下に一語を添へず隱約の間に齊宣の意を鼓舞して有爲の念を奮發せしめ彼をして諫に従ふ流るゝが如く進て仁政を行はしめんとす讀者其意を用ふるの如何に委曲にして言辭巧妙神韻縹渺到底區々たる文法の常律を以て拘束すべき者に非ざるを知れ

(四) 進賢章 梁惠王下

孟子見齊宣王曰所謂故國者非謂有喬木之謂也。有世臣之謂也。王無親臣矣。昔者所進今日不知其亡也。王曰吾何以識其不才而舍之。曰國君進賢如不得已將使卑踰尊疏踰戚可不慎與。左右皆曰賢未可也。諸大夫皆曰賢未可也。國人皆曰賢然後察之見賢焉然後用之。左右皆曰不可勿聽。諸大夫皆曰不可勿聽。國人皆曰不可然後察之見不可焉然後去之。左右皆曰可殺勿聽。諸大夫皆曰可殺勿聽。國人皆曰可殺然後察之見可殺焉然後殺之。故曰國人殺之也。如此然後可以爲民父母。

字解 故國は代々續きたる舊るき國を云ふ。喬木は大木の年を経て高くなりたるものなり。世臣とは累世其國に勳功ある臣をいふ。親臣とは王の親近して信用する所の臣なり。其亡は逃亡するを云ふ。卑踰尊は卑賤の人をして尊貴の人の上に立たしむるを云ふ。疏踰戚は疎遠なる人をして親戚の人の上に置くと云ふことなり。去之は之を棄て去りて用ひざるなり。國人

は「クニタミ」と訓す國內の人皆のことを云ふ

講解 此章は人を用ふるの要をいふ人臣を採用するは鄭重に視察して公平に擧げ用ふべきを論するなり

孟子が齊の宣王に見えて曰く所謂累代繼續せる古國とは高き大木の有るを謂ふではなし世々其國に勳功を盡せる臣下の有るを謂ふである然るに王に於いては親信する所の臣ありて王と休戚を同く共にする臣さへもなし昔者(昨日と云ふ)進んで出仕てせしものが今日は早や逃亡して去るを王には御承知がなしと云ふ。王の曰く吾が此迄採用したる人は皆不才なるものゆゑ其去るを格別意に留めざりき左れば如何にして此人は不才であるを識りて初より之を採用せず捨て置くべきやと。孟子の曰く國君が賢人を進め用ることとは實に鄭重にして謹み誠に已むを得ずして用ふる如くせねばならぬ何故とならば國君は尊位の者を尊ひ親しき者を親しむが本意なれども人才は却て卑賤なる疎遠なる者に多ければ其の卑しき者に尊位の人を踰えしめ又疎遠なる者に親戚の人を踰えしむることあるゆゑに餘程謹慎して人才を採用

せねばならぬ左右の近侍が皆此人は賢者であると云ふとも未だ可ならざるなり又諸大夫が皆此人は賢者であると云ふとも未だ可ならざるなり國內の人が皆此人は賢者であると云ふて又其上に之を自ら視察して其愈々賢なるを認めて然る後に之を採用するなり左右の近侍が皆此人は不可と曰ふとも聽入ることはならん諸大夫が皆不可なりと曰ふも聽入ることならん國人が皆不可と曰ひて然る後に之をも自ら視察して其不可なるを認て然る後に之を去るなり又人才の進退ばかりではなく刑を用ふるも亦此の如く慎まねばならぬ左右の近侍が皆殺すべしと曰ふも聽くなかれ諸大夫が皆殺すべしと云ふて然る後に之を察して其殺すべきを見て然る後に之を殺す故に國人が之を殺すと云ひて王一人の私刑でなく所謂天討と稱するなり此の如くして然る後に以て民の父母と稱す可きなり此章は古語に所謂民の好む所は之を好み民の惡む所は之を惡む此を民の父母と謂ふの意にして想ふに今日立憲政体の眞意も之に符合せり

【文法】

世臣の字を以て親臣を引出し無の字を以て有の字と對照するなり 如

不得已は一個の慎と云ふ字を形容するなり下節に數個の然後の字あるは正に慎の字の發明なり 未可也 勿聽は大意同じけれども未可は軽く勿聽は重し以て賢を用るは欲する所に於て人を退くるは願はざるの意味なるを知るべし 故曰國人殺之の一句を引證とす此一段にて全章を收め來りて如此云々にて結住するなり

(五) 王人章 梁惠王下

孟子見齊宣王曰爲巨室則必使工師求大木工師得大木則王喜以爲能勝其任也匠人斲而小之則王怒以爲不勝其任矣夫人幼而學之壯而欲行之王曰姑舍女所學而從我則何如今有璞玉於此雖萬鎰必使王人彫琢之至於治國家則曰姑舍女所學而從我則何以異於教王人彫琢玉哉

字解 巨室は大なる家屋を云ふ 工師は匠人の長なり 匠人は大工のことなり 斲は削つり切ることなり音は宅なり 姑は苟且の意にてまづちよいとと辯するなり 璞玉は玉の石中に在るものを云ふ即ち「あら玉のことなり」 王人は玉を琢磨する人にて字音は久なり玉の字と異なり寶玉の玉は點下にあり玉人の王は點上に在り 萬鎰は二十萬兩なり(一鎰は二十兩是れ玉の價を云ふ製玉のの手數料にあらざるなり 彫琢は玉を彫り琢つと云ふて玉を磨き上ることなり

講解 此章孟子が比喻を設けて國家を治ることを學者に任せぬは宜しから

ざることを宣王に諭すなり

偕孟子は齊の宣王に見えて曰く巨大なる宮室を造るときは則ち必す大工の棟梁(即ち大工の長なり)をして大木を求めしむ棟梁が大木を搜り得たるときは則ち王は喜んで其任に勝へたる棟梁なるかなと稱譽せるならんが匠人(手下の)が之を斲りて小さくするとき王は怒りて其任に勝へざるものなりと不平を鳴すならん此に國家を治るとを幼年より學びし人が壯年になりて之を行はんとするに王は姑くまづ「汝が學ぶ所を捨て、我の意に従へ」と曰ふ則ち何如 又一例を引て曰く今此に彫り磨かざるの璞玉がある其價は萬鎰であるけれども必す王人をして之を彫り琢たしめて美麗なる玉となさしむるなり然るに國家を治むるに至ては則ち姑らく女の學びし學術は捨て置て我の指圖に従がへと曰ふは何以て王人に玉を彫琢することを教ふるに異ならやと云ふは是れ國家を愛すること却て璞玉の萬鎰の價あるものに如かざるなり ○古へより賢者をして其學ぶ所を行しむること能はず賢者をして己の意に従はしめんとする多し是れ君臣相遇の希れなる所以なり



【文法】 此一章は二段に分ち上段は大木を求むるは工師に任じ國家を治むるは賢者に任ずるを述べ下段は玉を治るは王人に任じ國を治るを學者に任ぜざるを云ふ。必使の二字は上段下段共に鄭重なる意を示し兩段の始の字は何等輕易なるの意を示す孟子の文法自ら妙なり。何如と何以の字は齊王を提醒する所なり又此二節の文意相連屬せざるやの觀あるも其意味は實に相連屬せり。

(六) 當路章 公孫丑上

公孫丑問曰、夫子當路於齊、管仲晏子之切可復、許乎、孟子曰、子誠齊人也、知管仲晏子而已矣、或問乎曾西曰、吾子與子路孰賢、曾西蹙然曰、吾先子之所畏也、曰、然則吾子與子路孰賢、曾西曰、然則曾子於管仲、管仲得君如此、其專也行乎國政、如彼其久也、功烈如彼、其卑也、爾何曾比予於是、曰、管仲、曾西之所不為也、而子為我願之乎、

【字解】 公孫丑は孟子の門人にて公孫は姓丑は名にして齊人なり。當路於齊は齊國の政府の要路に當り政權を執るなり。管仲晏子は皆齊人にて管仲は桓公の宰相たり晏子も景公の大夫にて君を助けし人なり。可復許乎は孟子に於ても管晏の立られたる功名を復た再び期して待つべきやと云ふ。許は「アテ、ス」と訓し期して待の意なり。曾西は曾子の孫にて曾申字は子西と云ふ。或説に曾子の子と云。蹙然は畏縮して安んせざるの容貌なり。吾先子は曾參のことにて孔子の道を傳ふる曾子なり。脆然は「ムツト」怒色を含む貌なり。曾は則也と註せり因つて「かつて」とは訓すべからず。得君は君の寵用を得る。

なり 功烈は勳功を顯はし光を放つといふことなり 其卑也は王道を行は  
ずして覇道を行ふゆゑに卑劣なりと云ふ

六〇

講解 此の章は孟子の時勢を論ずるの切なるを知る學者にして時勢を知ら  
ざるものは迂儒なり 偕孟子の門人なる公孫丑の問ふて曰く先生は此の齊國  
の大臣たる卿相ともなりて要路に當りて政權を自由にするときは昔しの君  
を輔けて天下の覇たらしめたる管子及び君を助て名を諸侯に著はしたる晏  
子の功名をは復た期して待つべきやといふ 孟子の曰く子は誠に齊國の人  
てある天下の廣きを知らざるものなり 唯た管子晏子が在るを知るばかりで  
他に豪き人物のあるを知らざるなり 孟子因りて曾西が或人と問答したる  
ことを引て之を辯明せり 昔し或人が曾子の孫の曾西に問て曰ふには吾子と  
曰く子路とは孰れが賢れるやと曾西は畏れて蹙然として曰く吾が先子の曾子も  
畏るゝ所の人であると或人又曰く然らば吾子と管仲とは孰れが賢れるや曾  
西は蹙然と怒を示して曰く爾は何ゆゑに曾ち子を管仲に比較するや管仲は  
君の寵を得るは彼の如く専らなり又國政を行ふこと彼の如きは其れ久しき

四十餘年の間なり而して其の功烈は彼の如きは卑劣なり爾は何ゆゑに曾ち  
子を此管仲に比せらるゝや 孟子語を正しくして曰く管仲は曾西でさへも  
爲さざる所なり而るに子は我が爲に管仲の如きことを願はるゝや痛く之を  
拒絕せられしなり

文法 可復許の三字は俗極るの語調なり 子誠齊人也の五字孟子が公孫丑  
を賤しめたる語調鏗鏘たる音あり 其專也は下の勢を伏したるなり 其久  
也は下段の時を伏したるなり 其卑也は下段の徳不足の句を伏するなり  
爾何曾云々は前段に照應せるなり 爲我願之乎は上段の可復許乎の間に答  
ふる所なり

曰管仲以其君霸晏子以其君顯管仲晏子猶不足爲與曰以齊王猶  
反手也曰若是則弟子之惑滋甚且以文王之德百年而後崩猶未洽  
於天下武王周公繼之然後大行今言王若易然則文王不足法與曰  
文王何可當也由湯至於武丁賢聖之君六七作天下歸殷久矣久則  
難變也武丁朝諸侯有天下猶運之掌也紂之去武丁未久也其故家

遺俗流風善政猶有存者又有微子微仲王子比干箕子膠鬲皆賢人也相與輔相之故久而後失之也尺地莫非其有也一民莫非其臣也然而文王猶方百里起是以難也

字解

反手は手を反覆することにて易きを云ふ 弟子之惑は公孫丑の心に

惑ひて疑ふをいふ 滋はますくと訓す益の意と同じきなり 百年而崩は文王九十七歳にて崩せしゆ成敷を以て此の如く云へるなり 未治は文王の徳化が海内に徧く行届かざると云ふ 若易然は爲しやすいよふなるものぢやと云ふ意なり 何可當とは文王は何として吾が當る敵でないかと云ふ意なり 六七作は湯王より武丁に至るまでは太甲太戊祖乙盤庚等の聖賢なる君が六七人も作りて天下を治められたりと云ふ 運之掌は手の平に載せて物を廻轉する如く爲し易きを云ふ 故家は古より續きたる舊家を云ふ 遺俗は民間に遺りたる善き習慣を云ふ 流風は在上の人に遺りたる善き風儀をいふなり

講解

公孫丑が曰く管仲は其君桓公を以て天下の覇たらしめ晏子は其君景

公をして名を海内に顯はさしむる賢人なり其管仲晏子の如きも猶ほ爲すに足らざることやと云ふ 孟子曰く此の齊の國を以て天下の王たるは猶ほ手を覆すが如く爲し易きものであると 公孫丑又曰く是の如く爲し易きなれば私の惑ひが滋々と甚しくなります且つ文王の如き大徳を以て百年も此世を治められて後に崩御せらるさへ其徳は猶ほ未だ天下に洽く行き届かざるに其子武王と周公が之に繼續して徳を施されしかば然る後天下に大に行はれしなり今先生は天下の王たるは易き如く然りと云へば文王も法り倣ふにには足らざるか 孟子の曰く文王は何として吾等の當り敵す可き人ならん 文王の王たることの難きは其時勢が今と異なる所ありたるなり成湯より武丁に至るまでに聖賢なる大戊や盤庚の如き君が六七人も起りて天下の人民が般の徳に歸服することが久くありたり久しく歸服するゆゑに俄に之を變じて我に服せしむると難し又般の武丁といふ君は威徳盛にして諸侯を來朝せしめ天下を治め有つことは之を掌の上に回轉する如く自由自在にせしなり而して紂王が武丁を去ることは未だ久しからずゆゑに其故るき家や遺り

たる俗の習慣や残り流るゝ風儀や善良の政治の方法など猶ほ存續するもの有り又紂王には微子、微仲、王子比干、箕子、膠鬲と云ふ臣あり皆賢人でありて相與に之を輔け相けてゐるゆゑに久しくして而後に之を失ひしなり一尺の土地も其紂王の所有ならざるなく一個の民も其臣であらざるはなし然るに文王は僅かに百里四方の小國より起るゆゑ是を以てむつかしきこととてあると云ふなり

**文法** 以齊王の以の字は上の句の二の以の字を承け來るなり王の字は上句の霸と顯の字に對照したるなり猶反手也は此一章の主眼なり文王不足法與の一句は弟子の感滋甚の句に相應するなり由湯以下變也に至る一層は人心の商を戴くの舊きを見はず武丁より有存者まで六句の第二層は商家の貽徳の永遠なるを見はず又有以下の數句第三層は衆賢人維持の力を見はずなり

齊人有言曰雖有智慧不如乘勢雖有鎡基不如待時今時則易然也夏后段周之盛地未有過千里者也而齊有其地矣雞鳴狗吠相聞而

達于四境而齊有其民矣地不改辟矣民不改聚矣行仁政而王莫之能禦也且王者之不作未有疏於此時者也民之憔悴於虐政未有甚於此時者也飢者易爲食渴者易爲飲孔子曰德之流行速於置郵而傳命當今時萬乘之國行仁政民之悅之猶解倒懸也故事半古之人功必倍之惟此時爲然

**字解** 鎡基は田を耕すの利器にて鋤の類なり易然は爲し易きことを云ふ夏后般周は夏般周の三世を云ふ何故に夏のみ后の字を附すると云へば夏は禪讓を以て天下を得て般周は征伐を以て得たり因て夏后と云て尊稱するとの説あり雞鳴狗吠は雞の鳴く聲や犬の吠ゆる聲を云ふ改辟は別段に改めて土地を開拓すること辟は闢と同じく通して用ふるなり憔悴はやせかむけると訓す苦困するの容貌なり虐政は不仁不慈の政を云ふ置郵は今の郵便の開けざる前には傳馬と云ふものあり例へば品川驛より大森驛と云が如く驛々に馬を置き急便あらば即ち之を走らせて順次に遞送するなり置郵を分てば置は緩にして郵は速かなり傳命は上の命令を順達するを云ふ

倒懸<sup>〇</sup>は足を縛りて倒さまに釣り下げること困苦の状を形容せしなり  
 講解 此一段は孟子は齊人の語を引き諭す齊人言へるとあり智恵がありとて  
 も時勢に乗じて爲すに如き及ばぬ鐵基と云ふ田器の銳利なる者が有りとして  
 も耕作の時候を待て耕すには如き及ばぬと同じとにて今日の時勢は天下の  
 王たるは適當の時勢なるゆゑ王たるとの易きは手を反すが如く然りと且又  
 昔し夏后殷周三代の盛なる時にても其所有の土地は千里に越えたるものは  
 有らざるに齊の國は千里に過るの土地が有りて雞の聲犬の吠聲が相聞えて  
 四方の國境に至るやうに人家稠密なるゆゑ齊の國は人民は澤山ある土地も  
 今より別に開拓せず人民も別段に聚集するに及ばぬ現在の儘にて仁政を  
 行ひて王たらば之を禦き止るものはなしといふ 且つ又王者の起らざるは  
 未だ此時より疏らきたることなし人民の暴虐なる政治に憔悴したるも未  
 だ此時より甚しきことはあらず譬へば飢ゑて數日も食はざるものは食物を  
 爲し易きなり旨きものでなくとも喜びて之を食ふなり又渴してゐるものは  
 飲物を爲し易く濁りたる水にても喜んで之を飲むが如きものなり 孟子又

孔子の語を引きて曰く徳化の流行すること置郵して宿驛の馬を走らせて  
 上の命今を傳達するよりも速かなりと今日の時世に當り萬乘の國(齊の國を指し云ふ)  
 より仁政を行はし人民の之を悦び喜ぶは猶ほ倒懸と云うて倒しまに釣り下  
 けられたるを解きて赦さるゝがやうなるものなり故に事業は古の人に半分  
 程の辛勞して其効驗は必ず古人に一倍するは惟此の時勢を然りとするなり  
 と云ふ時勢の易うして徳行の速かなるを説明したるなり  
 文法 此一章を兩大段に分つ齊王猶反手の句を以て一篇の樞紐とし上段は  
 覇道を點けて王道を崇ぶ下段は齊に王たるの易きを述ぶ 全篇は徳時勢の  
 三字を以て眼目とするなり 行仁政而王の句を以て以齊王の句に照應す  
 飢者云々の二句は王を致すの易きを形容する爲に引論して正意を用ひず正  
 意自ら明かなり 萬乘之國とは勢を云ふ 行仁政とは徳を云ふなり 事半  
 功倍の二句は齊を以て王たる手を反すの易きと文王は百里を以て難きとを  
 一括して此全篇の大結とするなり

公孫丑問曰、夫子加齊之卿相、得行道焉、雖由此霸王不異矣、如此則  
動心否乎、孟子曰、否、我四十不動心、曰、若是則夫子過孟賁遠矣、曰、是  
不難、告子先、我不動心、曰、不動心有道乎、曰、有、北宮黝之養勇也、不膚  
撓、不目逃、思以一毫挫於人、若撻之於市朝、不受於褐寬博、亦不受於  
萬乘之君、視刺萬乘之君、若刺褐夫、無嚴諸侯、惡聲至必反之、

字解

加齊之卿相は齊の大夫宰相の位に加はり位官を得るを云ふ 不異は

孟子の學徳なれば霸王の業を成すは同より知られてあるゆゑ怪異の事とは存  
せずとの意なり 不動心は心神を腦まして恐懼し疑惑して胸をドキ／＼する  
ことなきなり 孟賁は古の勇士にて多力の人なり故に事に臨んで心を動か  
さざるなれば之を借りて孟子の心を動かぬを稱賛するなり 告子は名は不  
害と云ふ孟子同時の人にて一派の學説を主張せしなり 北宮黝は北宮は姓  
にして黝は名なり 膚撓は己れの肌膚を人に刺さるゝも決して屈し撓ざる  
なり 不目逃は眼を刺るゝとも睛を轉して動かさぬなり 以一毫挫於人は

一本の毛ほどの些細なる辱を人に受ることを云ふ 若撻之於市朝は人の群  
集する所にて人に鞭打るゝごとく思ふと云ふ市場と朝廷は多人類の居ると  
ころなり 褐寬博は毛布の如きものを以て製したる寛大にして廣博なる衣  
物を云ふ今のハッピを被たるものゝ如し賤しき者を云ふ褐は毛織の粗末な  
るものなり 嚴諸侯は嚴り畏るゝ諸侯と云ふことなり 惡聲至は我を輕蔑  
して賤惡の言を以て譏りなどすることあらばと云ふなり

講解

此一章は孟子浩然の氣を説き出せり緒言にも言へる如く浩然の氣は

其理易に基けども其說斬新痛快なるを以て學者の稱揚して措かざる所なり  
公孫丑が孟子に問ひ曰く夫子が齊國の卿相と總理大臣の位に加はりて道を  
行ひ施すを得ば此に由りて天下の霸王となるは素より怪しみませんが若し  
此の如き場合となれば夫子は心を動かして恐懼するやうなることは無か否  
やと 孟子の曰く否なり我は年四十の時から心を動かしたることなし  
公孫丑曰く此の如くなれば夫子は昔の勇力ある孟賁よりも過き勝ることが  
遠く遙かに別であると稱賛せり 孟子の曰く是は別段難しきことてなきな

り告子さへも我に先たちて既に心を動かさぬてある 丑又曰く心を動かさぬには道の有るものにてあるか 孟子の曰く有り 北宮黝が勇氣を養ふは己の肌膚を人に刺さるゝも屈し撓むことなく己れの眼を人に刺るゝも睛を回轉せぬなり又一毫ばかりの辱を人に與へらるれば之を市街の中又は朝廷の上の人の群集する所にて撻打るゝが如くに思ふ又褐密博なる衣物を被たる賤しき者にも其辱を受けず亦萬乗の大國の君にも辱を受けぬなり萬乗の君を刺し殺すを視ることは褐を被たる者を殺すが如くにして嚴憚り畏るゝ諸侯とてなし己れを譏る惡聲が聞えたれば直ちに必ず返報の所爲を致す。是は刺客の流にて必勝を以て主として心を動かさぬなり

文法

此一章は心を動かさるゝを以て主とし其心を動かさるゝは知言と養氣とに由りて来るを明辨するなり 公孫丑問の四字章首にあるを省きて前章と連續し一大篇と成す可なりと頼山陽氏の説あり。我四十不動心は一篇の骨子とすべし 告子先我の一句は伏脈なり後に告子の事を述んが爲に先づ此に其脈の端を見はすなり 北宮黝の養勇の中膚撓より以下市朝に至る迄

は人に挫められざるを云ひ不受於以下反之に至るまでは人に報ずるの事を云ふ 北宮黝の勇を述ぶるは孟子自分の語にして孟施舍の勇を述ぶるは孟施舍の語を用ふ是れ文法の避板法にて姿色を取るなり

孟施舍之所養勇也曰視不勝猶勝也量敵而後進慮勝而後會是畏三軍者也舍豈能爲必勝哉能無懼而已矣孟施舍似曾子北宮黝似子夏夫二子之勇未知其孰賢然而孟施舍守約也昔者曾子謂子襄曰子好勇乎吾曾聞大勇於夫子矣自反而不縮雖褐寬博吾不憚焉自反而縮雖千萬人吾往矣孟施舍之守氣又不如曾子之守約也

字解

孟施舍は姓は孟名は舍なり然るに施の字を入るゝは發聲の時に舍を施舍と云ふによりて終に名は施舍と呼ぶなり 量敵は敵の強弱を見量りて斟酌するなり 會は双方が出合て戦争することなり 三軍は大軍のことを云ふ一軍は人數壹萬二千五百人にて其軍を合せたるものを三軍と云ふ 子襄は曾子の弟子なり又一説に子襄は孔子の弟子にて家語に解顔相の字子襄と云ふとあり 不縮は不直と全し禮記檀弓の篇に古は冠縮に縋ふとあり縮

は縦と全じ意にて直といふも全じ

講解

上段に北宮黝の勇を以て心を動さざるを述べ又孟施舍の勇を以て心を動さざるを述ぶるなり。備て孟施舍が勇を養ふは（此句中に所の字あり之を懸字として可なり）曰く己れは勝たれぬものを視ても猶ほ勝つが如くに思ふ敵を斟酌してから進み勝つことを慮りてから後に合戦するは是れ三軍の兵士を畏るゝものである。舍は豈に能く必ず勝つことをするや唯能く懼るゝ心がなきばかりである。孟施舍は専ら己れを見るのみ人を見ず曾子の學は己れ身に反求するに似たり北宮黝は勉て人に敵する勇にて子夏の學の篤く孔子を信して目的とするに似たり夫の二人の勇は未だ其孰れが賢ると云ふことは知らざるも孟施舍の守る所は其要約を得てをるなり。昔し曾子が其弟子の子襄に謂て曰く子は勇氣を好まるゝが吾は大勇を孔夫子より聞きたることわり自分の身に反り考へて正直ならねば禍寬博を被たる賤丈夫ても吾は惴れぬてはない畏るゝなり又自分が身に省みて正直であるならば敵は千人萬人あるとも吾は往て敵すべしと孟施舍の守る所は氣象ばかりである曾子の守る所の要約な

るには及ばぬなり曾子は身に反り求めて道理に循ひて守るゆゑに尤も其要を得たるものなり

文法

北宮黝と孟施舍との二人を借り來りて遂に曾子に説き到る是れ粗より細に入るの法なり。公孫丑は孟賁を借りて言を爲す故に孟子も黝と舎との勇を養ふを借り來りて之に答へ養勇より養氣に説き入り終に黝と舎とを以て子夏と曾子に説き入るの法妙なりと云ふべし

曰敢問夫子之不動心與告子之不動心可得而聞與告子曰不得言勿求於心不得於心勿求於氣不得於心勿求於氣可得於言勿求於心不可夫志氣之帥也氣體之充也夫志至焉氣次焉故曰持其志無暴其氣既曰志至焉氣次焉又曰持其志無暴其氣者何也曰志壹則動氣氣壹則動志也今夫蹶者趨者是氣也而反動其心

字解

不得於言とは言辭に於て通達し了解せざるところあるを云ふ。勿求於心とは其言の理を心に反り求めて考へるを爲さずして其言を捨置くべしと云ふことなり。不得於心は心中に不安の所あるを云ふなり。勿求於氣と



は心を抑へ制して無理に押付けて其助を氣に求むること勿れと云ふことなり  
 志至焉は人の志と云ふものは心の之く所とて即ち一身を支配するもの  
 なれば至極結構なるものと云ふ 氣次焉は氣は體に充るものにて志の次ぎ  
 てあるものと云ふ 持其志は専ら志を維持して動さぬ様にする事となり  
 暴其氣は氣力を養ひて之を殘暴せぬ様にするなり 志壹則動氣とは志が専  
 一になりて例へは今日は幾里の道を行きて何氏の宅を訪はねばならんと志  
 が専らになれば脚の痛みも構はずに行くが如し 蹶者は足が物に躓つきて  
 倒れるものを云ふ 趨者とは足早にて走ることを云ふ

**講解** 公孫丑が問ひて曰く敢て無遠慮に伺ふは先生が心を動さぬと告子が  
 心を動かさぬと其事柄を得て承るてとかでできるか 孟子の曰ふには告子が  
 常に誦する言は此の如しと告子の言を其儘に引用したるなり 偕て告子が謂  
 ふ言語上に於て通達しがたき所かあれば其の言語は捨て置て必ず其の理を  
 心に求め考ふべからず又心に於て安じかぬる所があれば其心を強制して動  
 さずして其の助けを氣に求めぬ様にせよと以上告子の言なり 孟子之を論斷

して曰く心に得ざることには氣に助を求めずといふは可なれども言に得ざる  
 を心に考へ求むること勿れといふは不可なり夫れ志と云ふは氣の將帥たる  
 ものにて氣とは此身體に充滿せるもの即ち志の卒徒となる者なり故に志は  
 固より至極のものにて氣は即ち之に次きたるものなれば其志を大切に保持  
 して其氣力を殘ひ暴らすことなかれと云ふ公孫丑は孟子が志至焉氣次焉と  
 言ひし故に専ら其志を保持せばよかるべきに又其氣を暴する無しと云はる  
 ゆゑ疑を起して問ふには既に志は至極のものにて氣は次のものと云ひて又  
 其志を持して其氣を暴する無しといふは如何なることぞ 孟子の曰く志が  
 専一になれば氣力を動かし氣が専一になれば反りて志を動かすなり今夫れ  
 蹶きて顛るもの趨り行くものは是れ氣の働き専らなるなれども反りて其志  
 を動かすものであるなり

**文法** 不<sup>○</sup>得<sup>○</sup>於<sup>○</sup>言<sup>○</sup>と告子の不知言を吐露する所にて勿<sup>○</sup>求<sup>○</sup>於<sup>○</sup>氣<sup>○</sup>の言は不養氣を  
 驗證するに足る是れ孟子の知言養氣と正反對なること炳然として見るべし  
 志<sup>○</sup>至<sup>○</sup>焉<sup>○</sup>氣<sup>○</sup>次<sup>○</sup>焉<sup>○</sup>の二句山陽氏解譯には二焉字皆斥すと云ふ辭なれ

ば志先づ此地に至れば氣も即ち次ぎて此地に至ると訓すべしと此說一理あるに似たり姑く存して参考に備ふ 蹶者趨者を蹶者の趨るはと訓し蹶者趨を一連讀して物に蹶きたるときは覺えずしてとんとんと數歩趨る是れ豈に其心の欲する所ならんや是れ全く氣の爲す所なりと云ふ說あり是は奇說にして正說に非ず 文章三轉四轉して漸々と深き處に引き入る此以下に至り遂に極底の浩然に入るゝなり

敢問夫子惡乎長曰我知言我善養吾浩然之氣敢問何謂浩然之氣曰難言也其爲氣也至大至剛以直養而無害則塞乎天地之間其爲氣也配義與道無是餒也是集義所生者非義襲而取之也行有不慊於心則餒矣我故曰告子未嘗知義以其外之也

字解 惡乎は何所に云ふ辭なり 我知言とは我は言語上の道理を知りて何の言論を聞ても通學せぬことなし天下の言論が耳に入りて心に氷解するゆゑ心を動かし驚くやうの言なしと云ふ 浩然とはひろくとしたるにて盛大流行の貌なり即ち前文に謂ふ所の氣は肺に充ちたるもの本來浩然たる

者なれども養を失ひたるゆゑ餒うるなり孟子は獨り善く此氣を養ひたれば浩然たるなり 至大は限量なく天地の間に滿つるを云ふ 至剛は屈し撓むことなきなり 以直は正直にして邪ならざるなり(此理は蓋し易に基く緒言を参考すべし)一説に以直養云々と訓し正直の道を以て養ふとも云へど意味却て通せざるに似たり 配義與道は氣が人心の裁制なる義と天理自然の道に配合すると云ふことを俗解せば己の氣が義理と天道とに合併して一つになりたりと云ふなり 無是餒也は氣が義と道とに配合したるときは事を爲すに勇決にして疑憚なる所なきがゆゑ心に虧缺たる所なし是れ餒ることなしと云ふなり 是集義所生者非義襲而取之也とは事々皆義に合ひたることを積み重ねて所謂塵積りて山を成すとの如く此事も彼事も義理に叶ふたるときは自然に浩然たる氣力が生ずる者にて一朝一度の義を行ふたるに由りて襲ひ取るではないと云ふなり 襲とは齊侯が莒を襲ふの如く敵の不意に鐘も鼓も鳴らさずして掩ひ取るを云ふ 行有不慊於心則餒矣とは事を行ひて義理に合はぬときは心に省みて不満足の所があると則ち肺氣に充たざる所あり

か之を飢うると云ふ例へは朋友が人に殺さるを見逃して助けもせずして歸るとき心の持なり

講解

公孫丑が復た敢て問ふには夫子の心を動かさぬと告子の心を動かさぬとは大に異なるものあり先生は何の長する所があるやと孟子の曰く我は言を知る天下の言論に於て其理を究極して其是非得失の然る所以を知るなり又我は善く吾が浩然の氣を養ひて彼の道義に配合し天下の事に於て懼るゝ所なきゆゑに心を動かすやうのことは無しと公孫丑は浩然の氣と云ふことは始て耳にしたることゆゑ知言の質問はせずして直ちに何を浩然の氣と曰ふやと問ひしなり孟子の曰く浩然の氣たる吾心に得て形も聲もなし言語を以て形容することはむづかしきなりと是れ孟子の實に是氣を有する所以なりと程子も云はれたり虎に遇ふものは真に虎の勢を説き得ざるか如し然し其氣の昧段を言はん其氣たるや至大にして際限なく至剛にして屈撓することなく且眞直にして邪なく天地の間に充滿せんとするの氣勢なり能く養うて之を害し虧損せずば則ち浩々然として天地の間に充ち塞がるなり而

して又其氣たるや義と道とに配合して居るゆゑ決して慚る所は毫もなし仰て天に慚ぢず俯しては人に耻ずとの正大公明なる氣勢ゆゑ王侯も畏るに足らず官爵も屈するに足らず千鈞の鐵槌挫く可らず三軍の兵士も之を懼れしむる能はざるの氣力あれば是れ餒うることも無きなり是は義を行ひ積み集めてから自然に生ずるものにて一日義を行ひ一事の義を脩むるに由りて不意打に襲うて浩然の氣が取れるものにてはなきなり凡そ事を行うて心に慚ずとは是れ人に對して不義理な事であると思ふ時は則餒えて氣勢がなくなるものである我は故に曰告子は未だ嘗て義を知らざるなり其義を以て心の外にあるものと思へるを以てなり(告子義外の事は告子の篇に見えたり)

文法

此一節は浩然の氣を説きたる尤緊要の所なり我知言我善云々此兩の我の字は告子に對して針する所なれば殊に我と稱せしなり難言也の此句は殊に妙なる所なり自得の意自ら顯る以直養を直を以て養ふと云ふ時は下の義と道とを以て養成するの事が解すべからず我故曰告子云々の告子の文字は前文告子の事を結ひ應ずるなり

必有事焉、而勿正、心勿忘、勿助長也、無若宋人然、宋人有憫其苗之不長、而揠之者、芒々然歸、謂其人曰、今日病矣、予助苗長矣、其子趨而往視之、苗則槁矣、天下之不助苗長者寡矣、以爲無益、而舍之者、不耘苗者也、助之長者、揠苗者也、非徒無益、而又害之。

字解

必有事焉は必ず義を集めて氣を養ふを事とする所ありと云ふ。而勿

正心は集義して氣を養成することを爲して而して其效驗を心に豫期すること勿れと云ふ。正は豫期すること又心の字を下句に貼して心勿忘と讀むの説あれども心の字は上の句に附して而勿正、心と讀むを可とす。勿忘とは集義して氣を養ふとを頓と忘すること勿れと云ふなり。勿助長とは人力を加へて無理と成長させることを云ふ。揠之は苗の穂を摘みて引き伸すことを云ふ。芒々然は疲れて氣を失ひ無知となる貌なり。其人は家族の人を云ふ。今日病矣は今日は苗を助け長せしめたるゆゑ疲れたりといふ病を疲ると訓するなり。槁矣は苗の根が抜けたるゆゑに枯れたるなり。舍之者は苗を耘りもせず助長せずして打棄てたるを云ふなり。

講解 此一節は養氣の方法を述ぶるなり孟子の曰ふ氣を養ふには義を集むるを事とせねばならぬ然れども心に其效を預め期することもならぬ又集義養氣の事を忘れて打捨置こともならぬ又聊か義を行ひて正大なる氣か作りかけたとして之を助けて俄かに長大に爲んと無理に助長することもならぬと助長の害あることを喩へて云ふに宋人のやうに然ることはならぬ昔し宋國の人に其の吾が田に植し稲苗の成長せざるを憂へて則ち一本づゝ其穂を摘みて引伸したる者がありて茫々然として氣抜けの如くなりて歸りて家族の人に云ひけるは今日は疲れたり予は苗を助けて成長せしめたりと其の子息が趨りて田に往て視しに苗は則ち槁れ果てゝありし今天下の人々も此の如く氣を養はんとして助け長せんものは寡きなり又養氣は駄目と云て之を打捨てたるものは苗を耘らざるものと同じこととありて浩然の氣の成立することなきなり又之を助長するものは苗を引き握くものなり徒らに益なきのみならずして又之を害し其浩然なるものを養ふ能はざるのみならず却て之を虧損するものであると云ふなり

【文法】此一節は引喩なり蘇子云く引喩の前に先つ一句を提するは莊子に此文法多しと此一節は直養して害する無れば天地の間に塞がるの爲に喩を引きたるなり 天下之云々の一句は轉して氣を養ふに歸着す此句以下は正喩夾寫の文法なり一説に白く忽正心の三字は衍文なり何となれば以爲無益以下の句に於て之を考ふれば勿忘と勿助長との二つを述べて勿正心の事を述べざればなりと又參考に資すべし

何謂知言曰諛辭知其所蔽淫辭知其所陷邪辭知其所離遁辭知其所窮生於其心害於其政發於其政害於其事聖人復起必從吾言矣 宰我子貢善爲說辭冉牛閔子顏淵善言德行孔子兼之曰我於辭命則不能也然則夫子既聖矣乎曰惡是何言也昔者子貢問於孔子曰夫子聖矣乎孔子曰聖則吾不能我學不厭而教不倦也子貢曰學不厭智也教不倦仁也仁且智夫子既聖矣乎夫聖孔子不居是何言也昔者竊聞之子夏子游子張皆有聖人之一體冉牛閔子顏淵則具體而微敢問所安曰姑舍是

【字解】諛辭は偏蔽なる言語にて正理にあらざるなり 所蔽とは心が外物の爲に掩はるゝことをいふ 淫辭は心が放まゝになり蕩けてゐる言語なり

所陷は其心が物に沈溺したるなり 邪辭は邪しまに僻める詞をいふ 所離とは其心が正理を叛き去りたるとなり 遁辭とは困り窮りて逃れんとするの詞なり 生於其心とは上に述ぶる諛淫邪遁の言を爲すべき念慮が其心中に浮み出るを云ふ 害於其政とは諛淫邪遁の言語を用ゆるやうになれば政事上にも必ず害することを執り行ふと云ふ 害於其事とは政を行ふに當りて取り失ふことがあれば一事一件にも害することがある政とは大體に就て云ひ事とは一件に就て云ふなり 善爲說辭とは上手に演説するを云ふ 辭命は政治上重要な命令若くは使者などに行くに口上を云ふ 聖矣乎とは聖人であること決しかねるゆゑに矣乎と連ねて決し又疑ふことばなり 曰惡是何言也は孟子が驚きたる辭なり惡とは俗にオヤ／＼と云ふが如し 昔者云々は孟子自ら聖人と云ふを避けて昔し孔子と子貢とが問答せられしことを引用せしものなり 夫聖孔子不居とは孟子の言なり聖人は孔子自らも其稱

には居らずして辭退なさるゝなり 皆有聖人之一體とは子夏子游子張の輩  
 は孔子の全体を行ふことは出来ざるも孔子の言語を學び得しものもあり又  
 文章だけを學び得しものもありと云ふことなり 具體而微は全體を具へて  
 は居るけれども判然せずして微々たるものなり 敢問所安とは孟子は子夏  
 子游子張顔淵の輩において何人の地位に安じ居るぞと問ふなり 姑舎是  
 とは孟子は此の語はちよつと止めよと云ふなり

**講解** 公孫丑が復た問うて曰く如何なることを言を知ると仰せらるやと孟  
 子の答に曰く諛辭たる陂偏の言論を聞けば其心が開明ならずして物に蔽は  
 れてあるを知る淫辭たる放蕩の言論を聞けば其心が物に陷落したるを知る  
 邪辭たる邪僻の言論を聞けば其人の心が道理に離れ叛きたるを知る遁辭を  
 聞けば其人は道に叛き心は迷ひて困窮したるを知るなり以上に述るやうの  
 言葉を爲すべき念慮が心に生ずる人は其政治を行ふには政理を害すること  
 がある其の政治に害あるのみならず一事一事にも害することがある此の道  
 理は聖人が復た此世に興りて出て給ふとも吾が言ふことに従ひて決して不

同意はなきなりと云ふ公孫丑は又語を轉して曰く宰我と子貢とは孔門にて  
 善く説辭を爲し冉牛と閔子と顔淵は善く徳義の事を言ひたり孔夫子に於て  
 は説辭も徳行も兼ねて在らせらるゝに我は辭命に於ては之を善くする能は  
 ずと仰せらる然るに孟子は總ての言葉の道理を了解するは上文に述ぶるが  
 如く明々了々たりとならば夫子孟子は最早聖人でありませうかと云ふ孟子  
 は驚きて曰く惡是は何たる言を述べらるゝや昔し子貢が孔子に問うて曰く  
 夫子は聖人でありませうかと孔子答へて曰はるゝには聖人とは我も能はぬな  
 り我は學んで厭くことをせず又人を教へて倦み怠ることを爲ぬばかりであ  
 ると子貢の曰く學びて厭かぬは智の明かなるなり教へて倦まざるは仁道の  
 物に及ぶなり仁にして智あり夫子は既に聖人であると子貢が曰はれし夫れ  
 聖人の稱は孔子も辭退せらるゝ位なるに吾を聖人とは何たる言にてあるや  
 と公孫丑又語を轉して曰く昔し竊かに之を聞きたることあり子夏や子游子  
 張は皆な聖人孔子の一躰として手一本足一本と云ふが如く孔子の言語が出  
 來るとか文章ができるとか政治ができるとかするものである冉牛閔子顔淵

の三人は孔子の全軀を備へてあれども判然せずして微弱にかすがに似てあると云ふが孟子に於ては此人々の中で何人の處に比し居らるゝやと孟子の答へに曰く姑らく比較することを止めよと孟子は此の數子を以て比することを好まぬなり

〔文法〕此の一節は知言のことを申ねて言ふなり上の四句は外よりして内を知こと下の六句は始に就て其終を知ること云ふ蓋し心は心の聲なれば心が明かなれば言にも病なし 何謂知言にて第七轉し宰我子貢にて第八轉するなり 善爲說辭善言德行之善爲善言は互文の法なり 曰姑舍是の三字簡便にし一頓挫するなり妙味言外にあり関子顔淵は一等の先進なるが故に孟子も辭を措きがたし然れども孟子は此人等を以て比することは好まぬなり 聖人を辭退するも其本意は此章末に在る願くは孔子を學ばんの一句なり此一句を吐くが爲に一層一層に勢を作るなり

曰伯夷伊尹何如曰不同道非其君不事非其民不使治則進亂則退伯夷也何事非君何使非民治亦進亂亦進伊尹也可以仕則仕可以

止則止可以久則久可以速則速孔子也皆古聖人也吾未能有行焉乃所願則學孔子也伯夷伊尹於孔子若是班乎曰否自有生民以來未有孔子也

〔字解〕伯夷は孤竹國名の君の長子にして弟叔齊と國を譲り亂を避けて首陽山に隠れて餓死せし清潔なる人なり 伊尹は殷の有莘と云ふ處の人なりしが湯王之を聘して用ゐて宰相とせしが紂王に進めて之を用ゐしめんとせしも紂王之を用ゐざるゆゑに復た湯王に事ふ此の如くする五度に及びて伊尹は湯王に勸めて紂王を伐ち天下を取らしめしなり 若是班乎の班は齊一なること一列に座するを云ふ伯夷と伊尹と孔子と均一に同様なる聖人であるかと云ふ意なり

〔講解〕公孫丑は又語を轉して曰く伯夷や伊尹は如何てござる孟子の曰く其の道各自に別にして同じからず伯夷は吾が君でなければ他に聖人の君があるとも決して事へぬなり又吾が使ふべき民でなければ決して使はぬ 天下治安なるときは固より進みて仕ふれども天下亂るゝときは退きて隠れ仕へ

ぬとの操行なるは伯夷であるが又何れの人に事へても君てなきはなし何人を使ふも吾が使役するところのものは民てなきはなし天下治まるも進みて仕へ亂るゝも亦進み仕ふる五たび紂王に仕へ又五たび湯王に仕へたるごとき  
の操行なるは伊尹である又以て仕ふべきときは仕へ以て仕官を止むべきときは止める以て久しく官に居るべきときは久しく居り以て速かに去るべきときは速かに去るは孔子の行ひである皆其の行爲は各異なれども皆古の聖人である吾は此の三人丈けの事を行ふ能はざれども願ひ望む所は孔子の所爲を學ひ倣はんとなりと孟子の標準とする所は唯孔子の行に在り公孫丑が直に問ふには伯夷伊尹が孔子に於ては是の如くに一列に比し得らるゝかと孟子の曰く否とよ生民が此天地間に始て有りてより以來に未だ孔子の如き聖人は有らざるなり

**文法** 此一段は公孫丑第十轉の間なり丑は孟子の意は関子顔淵の如き人物に比較するを好まぬと察したるゆゑに伯夷伊尹を以て問を起したるなり  
可以仕則云々は覺えずして孔子に入る所に力を費さざるは孟子老練の口調

と謂ふべし 皆古之聖人也の一句にて上の三句を一承して一結するなり  
學孔子也の句は上の姑舎是の本意を吐露するなり 伯夷伊尹於孔子の間答

は第十一轉したるなり

曰然則有同與曰有得百里之地而君之皆能以朝諸侯有天下行一不義殺一不辜而得天下皆不爲也是則同曰敢問其所以異曰宰我子貢有若智足以知聖人汗不至阿其所好宰我曰以予觀於夫子賢於堯舜遠矣子貢曰見其禮而知其政聞其樂而知其德由百世之後等百世之王莫之能違也自生民以來未有夫子也有若曰豈惟民哉麒麟之於走獸鳳凰之於飛鳥泰山之於丘垤河海之於行潦類也聖人之於民亦類也出於其類拔乎其萃自生民以來未有盛於孔子也

**字解** 一不辜は一人の罪あらざるものを殺すといふ辜は罪と全し。汗不至

阿其所好とは汗は下るとして土地の卑きことを云ふ以て智識の卑下なることを云ふ其の好む所に阿諛するやうのことはせぬとなり 以予は宰我の名が予と云ふゆゑに吾身を以て夫子を觀るといふなり 等は等差を付けて是は



二等是は三等と次第することを云ふなり 麒麟は毛虫の長とて獸の中にて賢りたるもの至て仁獸にて口に生物を食はず足に生草を踏まずと云ふ 鳳凰は羽虫の長にて天下至治の時ならては世に出てずと 丘埳は小なる岡を丘と云ひ蟻の塚を埳と云ふ凡て小山のことを言ふなり 行潦とは大雨の時に庭を流るゝ水流を云ふ源なき水なり 出於其類拔乎其華とは例へば鳥の類にて鳳凰は其類を出たるものなり其華り聚り群がる中にて一個は目に立つやうに卓出してゐると云ふことなり

**講解** 公孫丑が又問うて曰く然らば則ち伯夷伊尹はとも孔子の大聖には及はぬなれども三人一列に聖人と云ふからは何か同じき所があるかといふ 孟子の對へには有ますとなり夫は此三人とも百里の僅小なる土地を得たならば天下を得るに至らん然し一事の不義を行ひ一人の無罪なるものを殺して天下を得るやうなことは皆爲せぬものである是が則ち三人とも同じき所であるなりと 公孫丑又問ふ其の異なる所はいかゞであると 孟子對へて曰ふ昔し孔門に宰我子貢有若と三人の高足ありて其言ふ所は孔子の眞面目

を述へしものにて其智識が卑下にして高明には至らねども其自分の好む人物を賛揚して其人に阿り諛ふことはせぬゆゑに此宰我始め三人の述ふること眞面目である因て三人の言を以て孔子の伯夷伊尹より賢りたることを知るべしというて扱宰我の述るには予を以て孔夫子を觀るに其徳は古の堯帝や舜帝に賢りたることは遙かに遠く上であるといふ子貢の述ぶる所は其人の制する禮式を見れば其人の政治を知る其人の制する音樂を聞けば其人の徳を知るに因り昔の禮と樂とに由りて百代の後より百代の王の政治や徳行を測り知りて其王の等級を作りて見るに之に相違することなし天地開けて生民が出来てから未だ孔子の如き人物はあらずといふ 有若が述ぶるには豈に唯人民のみに衆人と賢れたるものがあるばかりではなく麒麟が走る獸の中てまさりてあり鳳凰が飛ぶ鳥の中て賢りてあり泰山なる大山は丘埳の小なる山に賢りたり河海は行潦に賢りてあるが如し聖人も此人民とは同類のものであるなれども其同類を出て其萃り群がる中より抜き出てある人民が此世に有りしより孔子程の徳行の盛なる人はあらぬなりと孟子の孔子を

推尊するに己の言を用ゐずして昔しの孔子門下の親炙者を以て之を述べしなり

**文法** 此一段は孔子の群聖人より盛なることを言ひて孟子の孔子を學ばんと云ふ所以を見はすなり 宰我子貢有若と一句に總合して又宰我日子貢曰云々と分割して言ふ 未有夫子也の句は上の未有孔子也の句と照應せるなり 愚考に聖人を譬へは純金の如きものにて金に大小あれども皆純金ならざるはなし伯夷や伊尹は其金の小なるものにて孔子は其大なるものなり伯夷は聖の清なるもの其清潔なる所が聖人の徳にて伊尹は聖の任なるものとなれば其任ずる所が聖人の徳なるなり孔子は清もあり又任もあり何も角も備る所の大聖人なり

(八) 四端章 公孫丑上

孟子曰人皆有不忍人之心先王有不忍人之心斯有不忍人之政矣以不忍人之心行不忍人之政天下可運之掌上所以謂人皆有不忍人之心者今人乍見孺子將入於井皆有怵惕惻隱之心非所以內交於孺子之父母也非所以要譽於鄉黨朋友也非惡其聲而然也

**字解** 不忍人とは人間は天地生物の心を各自に得るを以て如何なる人にも人に對しては之を愛憐なる情あり罪もなきに人を殺すことはできぬ又困窮するを見ては氣の毒でならぬといふ人に忍びかぬるの心なり 斯はすなわちと訓じてもよきなり 是は極々輕捷の語意にて人に忍びざるの心あると「ずぐ」と斯にといふ意なり 不忍人之政とは人民が愛らしくて誥虐なることを爲すは實に忍びぬといふ政治なれば税を輕めて役を緩にすることを爲すなり 運之掌上とは事の極めて爲し易きをいふ譬へは物を手の中にてまろめると同じことなりといふ 乍見とは思ひがけなくふと見ることなり 孺子は嬰兒のことをいふ 怵惕は驚き動く容貌にて俗にハラハラと思ふと同

じ意なり 惻隱とは傷み痛むの深切なる心なり是が人に忍びざるの心といふ心なり 内交は孺子を助けて其父母と交際を結ばんと心の心あるにあらず 要譽は孺子を助けて仁者と稱せらるゝの名譽を要求するをいふ 郷黨朋友は郷は二千五百戸の村にて黨は五百戸の村なり 朋は同門の人にて友は互に意の能く合ひたるをいふ 惡其聲云々とは彼は不仁な人なり孺子の井に入るを助けぬと評判さるゝを惡むにもあらざるなり

講解 此章は人の性情には四端の見はるものなれば人たるもの天の我に與へられたる本然の仁心を擴充せねばならぬとの大意なり

孟子曰く人の此世にあるや誰も皆な人に忍びざるの愛憐の心あるなり先王(昔王なり)は人に忍びざるの心があれば斯に人に忍びざるの仁政を行ふことである今それ人に忍びざるの心を以て人に忍ざるの仁政を行へば此の天下を始めて太平にすることは之を掌上にて物を運轉するが如く極めて容易なることとてござる 人々皆な人に忍びざるの心があると謂ふ所以は今や人が乍ちに孺子が井中に陥入んとするを見ては皆な怵惕として驚き動きて又彼

はかわゆさうじや(惻隱)との心がありて之を救ふものなり是は交際を孺子の父母に結ばんとするでもなし又名譽を郷黨の朋友間に要求するでもなし其の不仁者と稱せらるゝ聲を惡み嫌ひて爲るてなし全く天然の本心なる仁の端があらわれ出てたるものであるといふ此文中に乍見の二字が中々肝要なる文字にてフト見たる所にて此心が動くといふことにて思を鍊る心を碎くの時間はなきことが此二字にてあらはるゝなり

文法 此一篇は一層一層聳え翻へるやうの勢がある九層の高塔を築くの文法にて孟子の特に慣用する所であります 人皆有不忍云々の一句は突起法といひ又破題法とも稱するなり 先王の二字は上の人皆の字より生み出し來る突然にはあらず 所以謂人皆云々に起句の語に就て一大轉を爲す 今人云々は上の先王の字に對するなり 乍見の二字極妙なりと既に見て後に動くは人爲的の疑もあれども早急自然的の意を顯はすなり 非所以云々の以下三の非を連ね用ふる是れ力を極めて仁心の發する時の情景を形容せしものなり

由是觀之。無惻隱之心。非人也。無羞惡之心。非人也。無辭讓之心。非人也。無是非之心。非人也。惻隱之心。仁之端也。羞惡之心。義之端也。辭讓之心。禮之端也。是非之心。智之端也。人之有是四端也。猶其有四體也。有是四端。而自謂不能者。自賊者也。謂其君不能者。賊其君者也。凡有四端於我者。知皆擴而充之矣。若火之始然。泉之始達。苟能充之。足以保四海。苟不充之。不足以事父母。

【字解】羞惡とは自己の不善を羞かしく思ふと人の不善を見て憎む心を惡と曰ふ此心のなきものはなし昔し某なる人群女の中にて裸躰せられて羞るの心なし此は既に人心を失ふものなり 辭讓とは譬へは寒中に大勢の居る所にて火鉢壹個を己れ一人に供せらるとき己は之を泰然と受けて居らぬ必ず之を辭して群居の人に譲るならん物をして己を去らしむるは辭なり物を人に推し及ぼすは讓なり 是非之心とは其善を知りて是とし其惡を知りて非とするの心なり無智の少見と雖も色の赤きものと黒きものとを與ふれば色の赤を取るゆゑ是非の區別は天然にあるものなり 人之有是四端云々とは

人間には必ず此の惻隱と辭讓と羞惡と是非の情が有るは恰も人に四體として手足の四肢があるが如くて此の四端の情のなきものはなしと云ふなり 擴而充之とは人には惻隱の心があるゆゑに孺子の井中に入るを見る時にのみ發せず何事を見ても發するやう又發する以上は何處迄も推し廣めて十二分に遣り付けるを充ると曰ふなり 火之始然とは火がちよろ／＼と燃かけたると本心より四端の見はるを形容せり 泉之始達とは山中の泉の水がちよろ／＼と流れかけたることにて是亦上の句と全意なり

【講解】是に由りてと上に述べたる孺子の井中に入るを見ての事を受け之を觀れば惻隱の心の無きものは人に非ず又羞惡の心なきものは人にあらず辭讓の心なきものは人に非ず是非の心なきものは人に非ざるなり其の惻隱の心が即ち性の本然なる仁の動きかけたるにて即ち仁の端である羞惡の心も本性の義より動きたるにて義の端なり辭讓の心は本性の禮より出るゆゑ禮の端なり是非の心は本性の智より出る智の端なりと此の如く本性に仁義禮智が備はりてあるものゆゑに其端があらはるゝものである人として此の四

端の無きものはなし必ず四端があるは丁度人に四體とて手二本足二本があるやうなものである是の四端が有りて自ら仁義禮智の行ひは出来ぬと云ふは自己の身を賊害するのである又其君をして此の仁義禮智を行なはしめざるは君主を賊害するのであると此の一句は當時の諸侯に仁義の行をすゝむるものなきゆゑに附言せしなり凡そ我が身に四端があれば皆之を擴張して充分に行ふことを知るを要するなり例へば火の始めて然え出て泉の水が始て流れ達するやうであるから苟も之を充てゝ弘げるときは以て四海を保安することが十分である苟も之を充てざるときは即ち不仁不義不禮不智の人間となるゆゑに以て我が父母に事へるにも不十分であるなり

此の四端に信を言はざるは既に誠心を以て此の四端を推しひろむれば信は其中にこもりてある譬へば五行の土が四季の氣候の木火金水の中にこもりて土用となりてあるが如しといふ人々仁義禮智信の本性があることは此章にて明白なり

**文法** 由是觀之以下一轉し波瀾を作す 無惻隱之心以下の四の無の字を用

みて下の句に有るの字と反照するなり 非人也の一段を一反筆として仁之端也の一段を一反筆とし即ち一反一正の文法なり 人之有是四端也の一句を以て一反一正の段を總合したるなり 首段には不忍の一心より説き起し中段には惻隱より仁義に説き入る末段に至りて四海の大より又父母の事にまで錯綜して抑揚する所は孟子文章の妙味ある中々訥言の及ぶ所ではなし

(九) 矢人章 公孫上丑

孟子曰、矢人豈不仁於函人哉、矢人惟恐不傷人、函人惟恐傷人、巫匠亦然、故術不可不慎也、孔子曰、里仁爲美、擇不處仁、焉得智、夫仁、天之尊爵也、人之安宅也、莫之禦而不仁、是不智也、不仁不智、無禮無義、人役也、人役而恥爲役、由弓人而耻爲弓、矢人而耻爲矢也、如耻之、莫如爲仁、仁者如射、射者正己而後發、發而不中、不怨勝己者、反求諸己而已矣、

〔字解〕 矢人は箭を作る人なり 函人は甲を造る人なり 巫はミコといふ神前にて音楽の舞を爲して人の病氣平愈せんことを祈るものなり 匠は棺等を造る大工の事にて人の死するを待つ 里仁爲美とは論語にも見えし如く「仁に居る」と訓し心も身も仁の場所に寄せて離れざるを云ふ 天之尊爵といふは仁は天より與ふる所の人道の首たるもの故に仁あれば人々之を尊敬して愛慕する者故天の尊爵といふなり 人之安宅也とは仁者は人心全體の徳を得て天理自然の安樂を得るゆゑ人の安宅なりといふ 人役とは人に使役

せらるゝ卑陋の身を云ふ一生頭の上らぬものなり 射者正己とは弓を射るもの自分の身構を正直にして的を定むるなり 反求諸己而已矣とは弓が中らぬとて的が悪しゝ又弓がわるし又敵手が無理を爲した杯といふ人はあらざ之は己の身構へがわしゝ又的をねらふことがあしゝと自分の身に反求するのみであるといふ

〔講解〕 此一章は人は仁を第一に心得ねばならぬことを比喻を以て述ふるなり 孟子の曰く矢人の箭を造るは其心が函人の甲を造るより不仁なるものでなきなり又巫が人の病を祈りて全快し死なざるを願ふの心あると匠の棺を作りて人の死を待つ心の巫が匠人より仁者であると曰ふことはなし唯金を得るの目的よりして其の天賦の良心は異なるなくとも其の情の發動する所は大に異なる所があるなり故に人の爲に術は慎みて氣を付けねばならん 孔子の曰はるゝに仁の場所に心も身も寄せて恰も居宅の如くすべし撰擇して仁に處ねば焉くんぞ智恵かあるとせんと(以上孔子) 夫れ仁は天地生物の心に萬善の元なれば仁あるものは人が之を尊敬するゆゑ天の尊き爵と云ふ又

仁は本心全軀の徳にて天理自然の安樂なり故に人の安宅と云ふ此の尊爵なり安宅なる仁の道を行ふに誰れか之を防禦するものはなきに之を行はぬ不仁者は是れ不智の人なり不仁不智無禮無義は人の爲めに使役さるゝ卑陋者なり人の使役となりて使役さるゝを耻るは由ほ弓を造る職業の人にて弓を作るを耻るが如く又矢師でありて矢を作ること耻るが如し若し之を耻るならば仁を爲すには如かざるなり 仁者の行ひは弓を射るが如く射るものは己れの身を直くして軀を正しくして而後に矢を發つ發ちて中らざるも己に勝ちたる對手を怨む心は無く反りて其不中の理を己れの身に求め考へるものなり恰も仁者の人を責めずして己の身を責るに似たり

〔文法〕此章は三喻皆な射術に取る愈出て愈奇なり 單刀直入法にて矢人と函人とを頭から論説したり 篇首に哉の字を以て文章を掀舞せしめ 中段は五字の也の字を以てし 下段は而已矣の矣の字を以て收結するは自然の節奏と謂ふべし 爲仁仁者如射射者正己而發發而不中と此仁仁射射發發と連ねたるは頂針法と云ふなり

蘇子曰く此篇は活潑にして變幻なり端睨すべからざるもの游龍の天の翔るが如く迅雷の空を轟すが如しと真なる哉妙文章なり

(十) 取人爲善章 公孫丑上

孟子曰子路人告之以有過則喜禹聞善言則拜大舜有大焉善與人同舍己從人樂取於人以爲善自耕稼陶漁以至爲帝無非取於人取諸人以爲善是與人爲善者也故君子莫大乎與人爲善

【字解】以有過則喜とは子路は自修に勇む人なれば他人より自己の過を忠告するあれば直に其過を改めることが得らるゝを喜ぶなり 則拜とは禹王は過ちの有らざるに人が昌言(直言)をすると則ち拜禮を行うて己の身を屈して喜ぶなり 善與人同とは大舜は善き事あらば天下の人と共に之を行うて自分一己の私善とせぬなり 舍己從人とは人に善き行あらば己の行を止め捨て、人の善に従ふなり 耕稼陶漁は舜の始め賤きときに歴山と云ふ山村にて耕作を爲したり又河濱にては陶器の製造を爲したり雷澤と云ふ所にては漁業を爲して生活をせしことを云ふ 取於人とは人の善なることを見ては直に己も之に従ひ行ふなり 與人爲善とは人が善を爲すを取りて我も又其善を行ふゆゑに衆と偕に善を行うて自ら私せざるなり

【講解】此章は大舜の善を好むを主として子路と禹とを引きたるなり 孟子の曰く子路は他人より自己の行に過あるを忠告するときは誠にうれしがりて喜ぶなり又禹王は己を修むるに過行はなしと雖も他人が己の爲になる直言を述べらるゝときは之を拜して受けしとなり大舜に至りては禹や子路より大なるの善行あり其の行ふ所の善は天下一般の人と共に之を行ひて自分一己の善とせぬ己の行ひより人の行が善なるときは己を捨て、人に従ひ都て人に取りて善を行ふことを樂みとするなり大舜の始め賤しき時は耕作稼業を爲し又陶器製造を爲し漁獵を爲せしなり其時より都て人の善を見ては己の身に取り行ひしに非るものはなし之を人より取りて善を爲すは是れ即ち人と共に善を爲して自ら私せず大公無私の度量なりそれ故に君子の行ひは衆と共に善を爲すより宏大なるものはなし古人曰く濟々たる多士能を異にして功を同うす玉業の盛大なる所以なりと

【文法】此章の文法は五重の塔の如し一層は一層より高く子路より禹に及び禹より大舜に至りて地位既に極まる故に末節に舜の事のみを云うて其中に



62  
388

禹の事をも含めり 己を捨て、より説きて人に取りるに至り人に取りるより説きて人と與に善を爲すに至る筆意誠に健勁なり 善與人同は綱にして舍己從人以下は目なり

謹告 孟子中には性善章其他、尙、必讀の材料とすべきもの尠からざれど自分の怠りと云ひ出版部の締切催促、矢人の矢よりもしげければ不得已筆を此に擱きぬ

孟子必讀講義 終

專、文教、二、一

終

